

7 遊行記 (2017年5月～)

榎根 勇

発売後 2 カ月を過ぎても売れ続けているという村上春樹の小説『騎士団長殺し』の終わり近くに、「人が一人死んでいくというのは大がかりな作業なんだ」(第2部、p.422)というせりふがある。私にとっても、それは本当に「大がかりな作業」だった。

妻日出が 2016 年 9 月 26 日に 79 歳で亡くなって半年が過ぎた。この間に近親者だけの葬儀、二階の介護付き個室の明け渡し(次の人がすぐに入居した)、刈谷の家へのベッドの運搬(日出は施設のベッドを使わず自分の専用ベッドを購入した)、金沢→高岡→善光寺旅をして高岡の大越仏壇店で娘たちとお厨子を注文、熱田神宮→伊勢神宮→榑原神宮への一人旅、日出自身が設計した牛久浄苑のお墓への納骨、白檀の阿弥陀如来像をギャラリーメモリア銀座店で購入、新潟へ行って系図を調べ榎根勇家の過去帳を作成、この「系図」と「孫たちにつたえたいこと」(別紙)を教材に三人の孫とのパレスホテル東京での個別ミーティング、志野と春の熱海→奈良→京都旅、毎月命日の墓参り、日出の遺産の相続(三人分の手続きはすべて志野が自力でやってくれたが)と、初めての経験が多く、84 歳の老人ホーム入居者としては忙しい日々が続いた。でも自由の身となり、ストレスがなくなったためか、彼女を看取った直後ボロボロだった身と心は七割方まで回復した。アランナ・コリン著『あなたの体は9割が細菌』(河出書房新社、2016)という世界的なベストセラーがある。私たちの体は細菌との共同体なのだ。夫婦は唾や体液が混じり合うから、体内細菌も共有することになる。そういう意味で夫婦は一身(心)同体だ。日出が病むと勇も病む。彼女の介護をしている時、私は一時重い介護鬱になり、声が出なくなったことがある(美智子さまのように)。でも彼女を看取るまでは死ねないと生きてきた。

注文してから 11 ヶ月かかるという輪島塗の蒔絵のお厨子が出来上がれば、後は一周忌を残すだけだ。ほぼすべてやり終えたという気持ちになれたので、2017 年 4 月から遊行期に入ることに決めた。そして、無事に遊行期に入ることができて、いまは極楽に来たような気持だ。インドのバラモンは、^{がくしょうき} 学生期、^{かじゅうき} 家住期、^{りんじゅうき} 林住期、^{ゆぎょうき} 遊行期の順に過ごすのが人生の理想だという。私はいまその遊行期を好きなように生きている。音楽を聴いたり、本を読んだり、絵を描いたり、旅をしたりして。以下は私の遊行の記録である。だから遊行記と名付ける。この遊行記はこれまでの人生を共に歩んできた日出への供養である。彼女が亡くなった後の「大がかりな作業」の締めくくりとして書き始めた。

1. 山陰旅 (2017年5月)

学生時代の山陰旅行を思い出しながら、山陰「本線」経由でのんびりと汽車の一人旅をしたかった。でも最近はそんな旅をする人はいないらしい。豊岡から鳥取までは、直通列

車は走っていない。帰路に城崎温泉へ寄ったので知ったのだが、豊岡⇄鳥取の区間では、1両または2両のワンマン車輛を3回も乗り継ぎ、ホームで乗り降りする際には、自分でボタンを押してドアを開閉しなければならない。JR西日本は乗客の協力を前提に列車を運行している。山陰へ行く「本線」の役割は、伯備線に移ってしまったようだ。だから岡山までは新幹線で、そこからは特急「八雲」に乗り継いで安来へ行き、庭園日本一の足立美術館を観てから、松江へ行った。翌朝、駅の周辺を散歩していたら、新宿行き的高速バスに若者が二人乗り込むところに出合った。時代は変わったのである。

松江駅に下り立った時の私の第一印象は、①山陰には大柄な男や女がいるなど、②松江の海岸沿いに標高は低いが寝々たる山並みが連なっているな、の二つだった。まず①で、半島からの帰化人の影響を感じた。また②の低い山並みは、海岸沿いに出雲大社の裏側まで続いていた。この山並みと国引き神話は関連があると思った。

私の最後の仕事となった6年間にわたる愛知大学の21世紀COEプロジェクトを2008年春に終えた直後に、念願だった自由の解放感にひたるよりも前に、家で不安定な姿勢のまま洗濯槽から重いジーンズのズボンを持ち上げたため、椎間板ヘルニアになってしまった。複数の病院で診てもらったが全く効果はなく、1年以上自宅で寝て過ごした。ヘルニアは自己流の治療法を試行錯誤して何とか治した。ヘルニアが治ったところから日出の病気が進み、介護の手が抜けられない状態になった。自由の身となったのに、旅好きの（地理学者でもある）私が旅に出られなくなってしまった。彼女がかかっている病院への行き来と、家事以外は、家で本を読むだけの生活が始まった。旅をする代わりに、旅に関する本を読んだ。出雲については（芸術新潮などの雑誌のほかに）つぎの4冊の本を読んだ。

(1) 田中孝顕『ささがねの蜘蛛』幻冬舎、2008。

著者田中孝顕は「日本語クレオールタミル語仮説」の研究に生涯をかけた国語学者大野晋の信奉者である。私の今回の山陰旅の主な目的は、出雲大社と八重垣神社を訪れることだった。和歌の始まりともされる歌「八雲立つ、出雲八重垣 妻籠みに、八重垣作る、その八重垣を」にちなんで、スサノヲノミコトとイナダヒメノミコト（稲田姫または櫛名田姫）を御祭神とする八重垣神社は、今は縁結びの大社として（特に御朱印集めの若い）女性に人気がある。著者はこの本の中で、「八雲」についてまずこれまでの通説を次のように退ける。

ところでこれまで「やくもたつ」はどのように解釈されてきたか。日国語辞典は『雲』は靈魂や生命力が生起する象徴であり、『八雲立つ』は国土の生命力が盛んに生起する意味として、『出雲』に冠されたもの」とする。この解釈は通説を採用したものであるが、雲が靈魂や生命力が生起する象徴というのはほとんど主観的な解釈に過ぎない上に、それが掛かる「出雲」が「多くの芽の伸び出す出藻」なのであればそこに何の繋がりも見られない。「雲の沸き立つところ」という意味だという説もあるが、ことさら出雲がそのような場所であるわけではない。

これに対して、著者はタミル語で「八雲」を次のように解釈する。

「やくもたつ出雲」は「豊富な泉（が）流れ出る出雲」あるいは「豊富な泉が現れ出る出雲」という意味となる。

私は水文学者であり、この解釈をととても面白いと思ったが、言語学が専門ではないのでこの説を論評する資格はない。なお書名の「ささがね」については、著者は日本書紀にある歌「わが背子が、来べき宵なり、ささがねの、蜘蛛の行なひ、今宵^{しる}著しも」を引いて次のように解説する。

「ささがね」は蜘蛛に掛かる枕詞である。「私の彼がきつと来る宵に違いない。ささがねの蜘蛛の動きが今宵は元気がいいから」という蜘蛛占いの習俗の存在を窺わせる歌で、「ささがね」が登場した上代の唯一の例である。

日国辞典は、『ささがね』は『笹が根』『細小蟹』『泥蟹』などと解する説があるが、中古以降の『ささがに』はもとの意味にこだわることなく、単に蜘蛛の異名とされた」とする。

これに対して、著者のタミル語による解釈は次のようになる。

以上から、『ササガネ』は『細い捕虫網』という意味となる。蜘蛛の捕虫網は細いネットそのものである。

この解釈なら、これまでの解釈とは違い、意味はとおる。私は以前に大野の日本語クレオールタミル語仮説についての本も読んだことがある。素人なりに大いに賛意を表したい気持ちになったが、これについても論評する資格は持たない。

(2) 梅原猛『葬られた王朝 古代出雲の謎を解く』新潮社、2010.

著者梅原猛は約40年前に、『神々の流^るざん』（集英社）なる本を書いて（ざんは難しい漢字でワードでは出せなかった）、「出雲神話なるものは、大和に伝わった神話を出雲に仮託したものである」と論じた。その説は、日本の神話を全くのフィクションと考える津田左右吉の説と変わりなかった。著者は、そのように考えた理由の一つに、出雲王朝の存在を示唆する考古学的な発掘物の乏しいことを挙げていた。ところが、1984年に荒神谷遺跡で出土した銅剣358本と、1996年に加茂岩倉遺跡で出土した39個の銅鐸で事情は一変する。さらに出雲大社では本殿の巨大な柱根が発掘され、平安時代の人々の口語り「雲太、和二、京三」、すなわち建造物の大きさを比較して、出雲大社の本殿が一番高く、次は大和奈良の大仏殿で、その次は京都の大極殿だという言い伝えが事実である可能性が高まった。建築家の中には、出雲大社本殿の高さは48mだったと推定する人もいる。

このような大発見は、当然これまでの歴史の見直しを要求する。著者も心穏やかではなかったであろう。その証拠に、著者は本書の最後を次のように結んでいる。「今回改めて出雲大社に参拝し、神前で礼拝してオオクニヌシノミコトに心からお詫びした。そして『私は間違っていました。改めてミコトの人生を正しく顕彰する書物を書きます』と固く誓って、出雲を後にしたのである」と。著者は、「これほど多くの宝器を所有したのは間違いなく出雲王朝の大王であり、おそらくオオクニヌシといわれる『人』であつたに違いない」と考える。

本書の結論は、出雲古代王朝の実在性と出雲神話の背後にある歴史的事実の存在の容認である。90歳を超えても学問的な情熱の衰えない著者がフィールドワークした場所を、その一部でもいいから歩いてみたくなって、私はこの旅に出たのであった。

(3) 高山喜久子『姫神の来歴』新潮社、2013.

著者高山喜久子は「やっかいな病気」にかかっていたようで、この本が出た年に51歳で急逝した。著者は「記紀」の編纂者たちが重視しなかった櫛名田姫と丹生姫という二人の「姫神の来歴」を明らかにするべく10年間にわたる旅に出た。本書はその記録である。本書が出版された年の正月半ばに、私たち夫婦は老人ホームに入居した。日日もパーキンソン病という「やっかいな病気」にかかっていた。病に冒されていたこの著者は、古代出雲の対岸にあった新羅王室の系図を調べ、仮説に仮説を重ねて、出雲の歴史を次のように読み解く。

須佐之男命が大国主命を殺害し出雲の王位に就くにあたって、大国主命の正妻であった櫛名田姫を妻とした。

157年に新羅から古代日本にやってきた延鳥郎が、大国主命を殺害し、出雲国の王権を篡奪した須佐之男命であるなら、この仮説は、173年に新羅に使者を遣わした倭の女王卑弥呼が櫛名田姫である、という新たな仮説を生むのである。

このような仮説を提示すると、出雲国が、倭の女王卑弥呼の都があったとされる邪馬台国なのか、と問われそうである。さらには、中国の史書に記された邪馬台国の所在にあわないとの理由から、出雲国と卑弥呼とを結びつけること自体、虚妄だとして一蹴されるかもしれない。

確かに、私の知る限り、著者の仮説は、今のところ虚妄扱いされている。ただし私が面白いと思ったのは、これまで無視される傾向にあった新羅王朝との関係を、堂々と主張していることである。半島とのかかわりを、私は第一印象①として感じ取っている。

(4) 岡谷公二『伊勢と出雲 韓神^{からかみ}と鉄』平凡社新書、2016.

著者岡谷公二は、神道には無関係で、古代史の専門家でもないが、すでに『原始の神社をもとめて』（平凡社新書、2009）と『神社の起源と古代朝鮮』（平凡社新書、2013）の二書を著している。まず本書の「あとがき」から引用してみよう。

神社の謎の渦にまきこまれ、深みにはまり、抜け出そうにも抜け出せず、気がついたらこういう結果になっていた、というのが実情である。それほど神社をめぐる謎は深く、私の心を離さなかった。

著者の研究方法はフィールドワークであり、出雲について次のように書いている。

自然物を神とみなすのは、原始の神社一般のありようだが、それが出雲で目立つのは、こうしたありようがこの地域では今なおよく残っているからである。そしてその理由をさぐると、出雲人の保守性もさることながら、根底には、出雲がその初期に大きな影響を受けた新羅＝佳那の存在があると考えられる。

出雲は新羅人と近く、今でも慶尚南道人と島根人とは、血液型その他形質上きわめてよ

く似ている。

このように他人の本を引用しているときりがないのでこの辺で止めるが、正直に言うと私は、上に引用した箇所は今回の旅を終えてから読んだ。そして第一印象①が正しかったことを確認した。

神話と和牛

私は松江エクセルホテル東急で一泊したが、志野は空の便で広島へ飛び、東広島の麻里の家に泊まった。翌日二人は車で松江のホテルまで来て私をピックアップしてくれた。おかげで出雲ではタクシーに頼らずに、時間を気にすることなく、自由に動き回ることができた。その晩は玉造温泉の佳翠苑 ^{みなみ}皆美に泊まった。老人と中年娘の三人連れだったせい
か、宿が用意してくれたのは、次の間と内風呂つき、六畳と二十畳近い座敷の二間つづきで、庭に面した三階の一番奥の和室だった。お客が少なかったのも特別に配慮してくれたのかもしれない。五万坪の枯れ山水を誇る足立美術館の庭園とは比べられないが、ミニ足立と言ってもいいくらいの、手入れのよく行きとどいた、池に鯉の泳ぐ庭だった。部屋で食べた料理も、露天風呂も、広い風呂も、素晴らしかった。玉造へ来たことのある麻里は、玉造温泉ではこの宿のランクは別格の星野リゾートに次ぐという。

私たちが訪れた出雲大社、島根県立古代出雲歴史博物館（考古学的発掘物展示、古代の出雲大社の復元模型など豊富）、八重垣神社（宝物殿の櫛名田姫の古い板絵）、神魂神社 ^{かもす}（最古の神社で御祭神はイザナキノミコト）、それに出雲そばの老舗かねや（私たちはカヤネと仮名書きしても間違っカネヤさんと呼ばれることが多かったのも、是非この店でそばを食べてみたかった）など、すべてが素晴らしかったのも、三人とも今回の旅に100点満点をつけた。フィールド屋である私はこれまでに日本や世界の各地を回ったが、日出と一緒の時以外は、一人での旅が多かった。ホテルでする一人の食事は味気ない。久しぶりに家族で100点満点の旅を楽しむことができたのも、玉造の宿代は私が払ったのだが、「僕は宿のランクも知らなかったし、特別な注文もつけてないんだよ。すべてJTBが決めたんだからね。感謝するならJTBにしてよ。一人旅だとうゆう部屋にはとめてもらえないので、とても良かった。ありがとう」と、逆に娘たちに感謝した。

翌日は二人と別れて、また鉄道の一人旅にもどった。そしてたびたびドラマの舞台になった餘部鉄橋の上を通過して、玄武洞を再訪したが、お目当ての柱状節理の玄武岩は学生時代に見たときよりは汚れていた。城崎温泉の川口屋では、本館ではなくホテルの方に泊まり、浴衣下駄ばき姿で地蔵湯と御所の湯を外湯めぐりした。外湯は全部で七つあり、宿でもらって首に下げたクーポン券を見せればタダで入れる。ホテルの方を選んだのは、私の胃袋は施設の食事になれて容量が決まっているからで、二晩続けて温泉旅館の夕食を消化する能力はない。夕食は外で軽くすませたが、朝食について小さな焼いたカレイがとてもおいしかった。香住でとれた日本海のカレイだという。新潟で育った私は、子供の頃こういう味のカレイをよく食べた。松江と玉造の宿で朝食の食堂でいただいたシジミ汁もお

いしかった。シジミ汁があまりにもおいしかったので、玉造ではおかわりをした。味噌汁係のおばさんは、私がシジミの実を食べていなかったので、差し出したお椀に残っていたシジミを新しいお椀の中に放り込んでから汁を足した。「宍道湖のシジミは実をちゃんと食べなさい」という意味だと理解した。ところが、城崎での朝食はアサリ汁だった。このアサリ汁もおいしかったが、よし今度は実も食べるぞと挑戦したら、ジャリッと砂を嚙でしまった。シジミは泥地で、アサリは砂地で育つ。いずれにせよ、ほんとうにおいしいものを食べるには、旅に出るしかない。

私は神社仏閣めぐりが大好きである、そこには『伊勢と出雲』の著者が惹きつけられたという謎が渦巻いているほかに、建造物、庭、仏像、宝物などの美があり、スピリチュアルな世界への道も開けている。この旅から帰ってすぐ、川上未映子と村上春樹の対談『みみずくは黄昏に飛びたつ』（新潮社、2017）を買ってきて読んだ。よくここまで素直な気持ちで語り合ったものだと感心している。川上未映子さんも、冒頭に引用した「人が一人死んでいくというのは大がかりな作業なんだ」という言葉は「ぐっとくる」という。この対談本にある彼女が描いたイラスト（p.93）の地下一階（心）と地下二階（スピリチュアル）の話がおもしろい。私の考えでは、地下二階は量子物理学の世界でもある。ある著名な物理学者は、量子物理学を本当に理解している人は一人もいないというが、私は理解できないのを承知で、「量子物理学を遊ぶこと」を遊学期の楽しみの一つにしている。もう一つの楽しみは、1万年間も続いた「縄文時代を遊ぶこと」である。大陸からの情報に接するよりも前のこの国に、現在の日本人の根っこ（基盤）があるのではないか、そこを自分なりに探してみたい。縄文関係の本はすでに10冊以上買ってきて、積んである。

話は変わるが、私は1985年に、当時の日本の地質学者の間では常識だった「日本海沈降説」（この説を解説した部厚い英語の専門書が築地書館から出ている）を疑い、日本列島はかつてユーラシア大陸の一部だったが、割れて、離れて、折れて、現在の姿になったのではないかという「日本列島断裂成長仮説」を科学研究費の報告書に書いて、「素人がなにを言うか」と筑波大の地質学者たちにつるし上げられ、「樞根は狂った」と日本中で噂された（らしい）ことがある。ある学生は「狂った教授の指導は受けられない」と私から離れていった。しかし数年後には私の仮説とほとんど同じものが定説と認められ、今では教科書にも載っている。その後、私をつるし上げた地質学者グループの多くが死んだ。私をつるし上げたことによるストレスが原因でなければいいのだが……。

私がなぜこんな昔話をここで書くかというと、古代出雲人は私が第一印象②で指摘した、海岸沿いの低いが寝々たる山並みを毎日見て暮らし、この山並みはどうしてできたのだろうかと考え、（私と同じように）どこかから引っぱってきたに違いないとの考えに到達し、それが国引き神話につながったのではないかと想像したからである。この仮説を書いたからこれに関連する研究はやっていないので、出雲海岸の寝々たる山並みの成因についてどのような研究が行われているか、私は全く知らない。しかし、鳥取の海岸には砂丘があるが、出雲に砂丘はなく、低い寝々たる山並みが日本海にせまっている。むかしの出雲

人が不思議だと思い、国引きを考えたとしても、責めるわけにはいかない。

出雲旅を終えた時点で、私の第一印象①と②は、いずれも出雲神話につながっているとの確信に変わっていた。そして、出雲神話は実話を神話として伝承したものであるとの確信も得た。私の心の底に沈んでいた「出雲」についてのモヤモヤしたおりは、きれいに流れ去った。旅はやはりいいものである。たぶんこの旅で、寿命は1年以上延びたと思う。旅で得られる情報もネグントロピー源かもしれない。

そもそも日本の「古代」は、世界史の時間尺度で俯瞰すると、「古代」と呼べるほど古い時代ではないのではないかと。文字情報が残っていないだけで、それを理由に、これまで日本の（フィールドワークのできない文献中心主義の）歴史学者は、それを「神代に近い古代」だったということにし、神話もフィクションだと無視して、正確な歴史を明らかにする努力を怠ってきたのではないかと。私は「縄文時代を遊びながら」いろんな書物を読み、私なりの日本論をまとめることを、遊行期の一番目の楽しみにしている。ただしこれはボケ防止のための遊びであり、「大がかりな作業」の締めくくりの一部でもある。村上春樹の騎士団長のアイデアなら、「印税のためではあらない」と言うだろう。

つくば市役所大穂支所前で6時25分発の始発バスに乗り、つくばエクスプレス、常磐線、新幹線と乗り継ぎ、岡山に着いたのは11時50分だった。朝食は東京駅で買った和牛弁当を、車中で『ひととき』を読みながら、ゆっくりと食べた。施設で淡泊な軽い食事を続けていると、旅に出た時くらいはと、朝からでも濃厚な肉が食べたくなる。岡山での「八雲」への乗り継ぎ時間は14分しかなく、新幹線の車中で「八雲」には車内販売はないというアナウンスがあった。急いでお昼の駅弁を探したが、適当な弁当を見つけることができず、また和牛弁当を買ってしまった。この弁当は「千屋牛すき焼き重」といい、包み紙には次のように説明してあった。この和牛は「〔岡山・新見〕日本最古の蔓^{つる}牛で、蔓とは特に優秀な系統のことを指す。昭和に入り和牛登録協会の創設者が和牛のルーツ調査をすると、日本最古の蔓牛が新見市の竹の谷蔓であることが判明した。千屋牛はその竹の屋蔓の系統を引く、和牛の原点であり、和牛中の和牛と呼ばれるようになった」と。この弁当は確かにうまかったが、翌日玉造でも夕食に和牛がでたし、帰路の新幹線でも他の弁当は売り切れで、またまた和牛弁当を買うはめになってしまった。だから和牛については、いまは食傷気味である。しかしうまいことはうまい。

近年外国人観光客が増えている。和食は世界遺産になった。観光の柱の一つが「食」であることは間違いない。和牛もその一員である。すでにWAGYUというオーストラリア産のブランド牛があると何かで知った。中国人も日本名でのブランド商標登録に熱心だ。和牛に限らず、日本の食べ物はなぜ美味しいのだろうか。ここで私が「和牛がうまいのは水のせいである」という仮説を提示したら、(村上春樹なら和牛と水についてのダブルメタファーでベストセラーになる長編小説を書くかもしれないが)、たぶんほとんどの研究者には妄想だと一蹴され、私を知る人は「ヤツもとうとうボケたか」とつぶやくことだろう。

科学的に考えると、「和牛とうまさ」を水で結び付けるには、たくさんの中間項を考えなければならない。親牛の遺伝子から始まって、飼育法、育つ環境、和牛のえさ、えさを育てる土、土のもとになった岩石、その土を育てた植物や微生物……等々。それらのすべてに水が関係していることは確かだが、すべてを因果的に結び付けて、「和牛がうまいのは水のせいである」とエビデンスを示すことは難しいかもしれない。でも遊学期に入った私には、科学的な因果関係を不明のままにしておくだけの心のゆとりが生まれており、因果関係の部分を「風土性」という便利な言葉で置き換えてすませる技ももっている。食べ物を含めて、日本が「いい国」であることは間違いない。ドリアンやマンゴーが美味しいことは確かだが、その美味しさのたぶん 95%以上は、雨季と乾季のある熱帯という自然環境に由来するものだ。これに対して和牛のおいしさは、日本の風土性に由来する。私の定義では、風土性とは、その場所の自然的情報と人文的情報が融合した情報のかたまりである。牛は世界中どこにでもいるが、WAGYUではなく和牛は、日本という「いい国」の風土性の中でしか育たない。「日本といういい国の風土性」をクールジャパンの売り物にする戦略を立ててみたらどうだろうか。遊学期に入った私には、もうその参謀になる気は毛頭ないけれども。

2. 遊学期のある日の「つくば散歩」

遊学期に入る前と後で私という人間はどう変わったか。それはメメント・モリ（死を記憶せよ）の一言に尽きる。特別WEB講座では、インドのバラモンが考える遊学期を次のように説明する。「人生の最後の締めくくりである『死』に向かって帰ってゆく時期。成長する中で身につけた知識と記憶を少しずつ世間に返してゆく。子供に還り、誕生した場所に還る」と。私としては、すでに「知識と記憶」は十分に世間に返したと思っているし、今でも心は子供のままだから、「死」への意識の持ち方がこれまでと違うだけで、それ以外は特に変わったことはない。違うのは、日出のことを思い出しながらのメメント・モリ、それだけだ。

遊行記の山陰旅を書き上げてホッとしたので、6月12日の月曜日に「つくば散歩」に出かけた（日曜日の人混みは避けている）。私はまだ車を運転するので、買い物などで週に1～2回は外出しているが、目的が終わればすぐに施設へ戻る。私の散歩コースは田畑や林のあるところだけで、市街地を散歩することは、これまでほとんどなかった。この日はまず「イーアスつくば」というショッピングモール（英語表記は「I I A S」だが、意味は「良い明日」ではないかと思う）の本屋へ行って、目的の2冊、東浩紀著『ゲンロン0 観光客の哲学』（ゲンロン、2017）とブリア=サヴァラン著 玉村豊男／編訳・解説『美味礼讃』（新潮社、2017）を買った。そのあとでアート関係のコーナーを眺めていたら、三好和義『室生寺』（クレヴィス、2017）という写真集を見つけた。私は室生寺金堂に祀られている十一面観音が大好きで、もう一度必ず訪ねると決めていたので、迷うことなくこの

写真集も買った。十一面観音のすてきな写真も数ショット入っている。私はアマゾンでは本を買わない。街の本屋がつぶれていくことへの私なりの小さな抵抗だ。イーアスなど新しい店に客をとられて、つくば西武デパートは閉店に追い込まれてしまい、多くの人が不自由している。私が通ったつくば市創設以来の本屋はもうつぶれてしまった。イーアスの本屋までつぶれたら、私の最大の楽しみがなくなってしまう。この日の小さな抵抗は合計7300円也。

本屋のあとでイーアスの珈琲館へ入ったら、「100円追加すればデカンタ入りで2杯分飲みます」とあったので、それを注文した。これまでは「2杯目は100円引き」だけだったように思う。イーアスにはスタバも入っている。客の要望を入れてシステムを変えないと珈琲館もスタバに勝てない。お客ファースト。客のことを第一に考えるのはいいことだ。外気が吸いたくて三階の食堂のベランダの椅子に架けて『室生寺』の写真集を観ていたら、何か食べたくなったので、「ふかひれあんかけごはん」800円を食べた。施設での昼食は欠食にしてある。この店は、食材には気を使っているらしく美味しかった。こんなものがイーアスで食べられるようになったとは、つくばも生活がしやすくなったものだと、50年前に茨城県新治郡桜村の筑波大学建設予定地を調査したことのある私は感無量だった。

そのあと車で中心部へ移動して、つくばの中央公園へ行った。公園の入り口に、平成25年のつくば研究学園都市の閣議決定50周年を記念して「未来への道」という記念物をつくった旨の説明板があり、ノーベル物理学賞を受賞した朝永振一郎博士と江崎玲於奈博士の銅像が立てられてあった。他につくばに関係のある小林誠博士と白川英樹博士の二人も同賞を受賞している。四人の博士のノーベル賞受賞を記念するために、つくば市は「未来への道」の建設を考えたようだ。完成は平成27年(2015年)だった。2015年は、日出と私は(施設で)死との格闘の真最中で、私には中央公園を散歩するだけの心の余裕はなかった。だから私は「未来への道」が出来ていることをこの時まで知らなかった。散歩しながら、朝永、江崎両先生とのことをいろいろ思い出していた。

金属板にある説明によると、朝永先生の受賞は(私はもっと早いと思っていたのだが)1965年だった。実は、私は1963年の夏にカナダへ留学する直前に、指導教官の福井英一郎先生に伴われて、二人で東京都文京区大塚にあった東京教育大学の学長室の朝永先生のところへ出発の挨拶に伺っている。当時はまだ1ドル360円の時代で、外貨持ち出し額は一人500ドルまでだった。まだ留学する人も珍しく、洋行帰りという箔さえ付く時代だった。実際に私が帰国した時には、ある新聞社が取材に来て記事になった。助手の身分だった私は教授に促されて学長室へ挨拶に行ったのである。私にとっては、朝永先生は雲の上の人だった。実は「未来への道」の説明文で「1965年という受賞年」を読むまでは、私の記憶の中では、私が出発の挨拶をした朝永先生はすでにノーベル賞を受賞された偉い先生だったのである。記憶は書き換えられる、あてにならないものだ、ということが分かった。その時の私はかなり上がっていたので、朝永先生が何をおっしゃったかほとんど覚えていない。

私は学部学生時代に、東武東上線沿線の常盤台にあった桐花寮に入っていた。旧兵舎だったバラック建てのおそまつな寮だ。この汚い寮に一度だけだが、高校生だった日出が訪ねてきたことがある（らしい）。彼女は修学旅行で上京した際に、急に思いつき、この寮へきて、入り口にいた学生に、「ここはキリハナ寮ですか」と聞いたらしい。「いいえ違います。ここはトウカ寮です」といわれた、と結婚してから何回も彼女は言って、二人で大笑いした。彼女は私の義理のいとこである。私の母の妹が彼女の義母だ。彼女が訪ねてきたとき、私は桐花寮にはいなかった（らしい）。

桐花寮については思い出せばきりが無い。安酒を飲みすぎて、終電に乗りおくれ、悪友と二人で咆哮しながら、池袋から寮まで、真夜中に、歩いて帰ったこともある。自由放任で、寮には門限などなかった。8人部屋に入れられた。同室の柔道部の体の大きな下級生二人が、酔っぱらって、喧嘩を始め、小柄な私が体をはって止めに入ったこともある。私は寮生活ですべての学部の80人以上のいろいろな学生と知り合いになった。そのつてを頼って、友だちの実家を（本人が居なくても平気で）泊まり歩いて、1ヶ月近い国内旅行をしたこともある。もちろん共済関係の宿舎などにも泊まりはしたが……。とてもおもしろい寮生活だった。

朝永先生は気さくな先生だった。このオンボロ寮の寮祭のときに、実行委員会の求めに応じられ、あの朝永先生が（その頃はまだ学長ではなかったかもしれないが学生に人気があった）、ほんとうに汚いこの寮の食堂にこられて、少し下ネタの混じった落語を一席語られたことがある。ノーベル賞を受賞された時、弟子たちに何か贈り物をしたいかと尋ねられ、ヒノキの風呂桶を所望されたという噂も聞いた記憶がある。教師も学生も貧しい時代だったが、今にして思えば、活気のある良い時代だった。

江崎先生は筑波大学の学長職を2期務められたように思う。それまで筑波大学では、学内関係者か母校出身者が選挙で学長職に選ばれるのが普通だった。「新構想大学」にふさわしい学長をと、若手の教職員グループが推薦人になったのではなかったかと思う。それで、敵地に降下する「落下傘学長」などといわれたりもした。それもあってか江崎先生は教員との関係を密にすることに気を使われたようで、「学長セミナー」（別の名称だったかもしれない）を企画されて、学長が指名した教員を講演者にする集会を何回か開催された。私はそのころ科学研究費で3年間の「バリ島の水循環と水利用」の調査を終えた後だったので、そのセミナーでバリ島の話をするように、世話役の人を介して頼まれた。

そのセミナーの打合せをするために、筑波大学の学長室で、江崎先生と二人で小一時間ほど話し合ったことがある。物理学と、フィールドワークを中心にする（私の）水文学とでは、研究対象も、方法論も、全く違う。江崎先生の哲学がどんなものかは知らなかったが、バリ島は三幅対の世界である。バリ島では、自然と人ではなく、自然と人と神の三者が並立する。バリ島の風土性に相当入れこんでいた私は、近代科学の基本と考えられていたデカルト的二元論に疑問を感じ始めていた（今ならデカルト的二元論の不完全さについて論文が書ける）。私は江崎先生に、バリ島の調査結果を例に、二元論と三幅対の違いに

ついて話をしたように記憶しているが、先生はあまり興味がなさそうだった。それでも先生は講演会場の一番前の列の中央に席をとられて、熱心に話を聞いてくださった。私たちは地下水の年齢測定に水分子を構成する水素や酸素の同位体濃度も測定していたので、多少は興味を持たれた部分もあったかもしれない。

話は一気に2017年まで進む。私は今春、筑波大学で開催された日本地理学会大会の懇親会に参加した。私は筑波大学を定年退官した1996年春以来、日本地理学会大会へは1回か2回しか出席していない。とくに日出の介護が始まってからはすべての学会への出席をやめていた。日本地理学会からは、名誉会員である私宛に毎回招待状が届いていたが、欠席ばかりで申し訳なく思っていた。今回は車で10分ほどの距離に居るし、日出が亡くなってから半年近くすぎて、気持ちも少し落ち着いてきたので、懇親会だけでも出席してみようかという気になった。時々お電話をくださった山本正三先生にもお会いできるかと思っていたが、骨折されたとのことで欠席、吉野正敏先生も入院されたと聞いた。大学院の修士課程で同級だった青木栄一君（東京学芸大学名誉教授）が車椅子に乗り長男の方に押ししてもらって参加していた。東京教育大関係者の中では私が最長老だったようである。ただただ驚くことばかりだった。懇親会は満員の盛況だった。

懇親会では、最初に筑波大学研究担当副学長の三明康郎教授（物理学専攻）から歓迎の挨拶があった。私より20歳以上も若いので、もちろん初対面だったが、「最近の筑波大学の研究状況はいかがですか」と尋ねると、「文科省の予算が徐々に減らされて、研究活動にも支障がはじめています」とのことだった。私たちの世代は日本経済のどん底が出発点である。Japan as No.1の頂点をすぎるまで、国立大学で研究を続けることができ、私は幸運だったと思う。おかげで私は研究費に不自由したという経験がない。理工系のない愛知大学でも、定年の年に21世紀COEプロジェクトが採択され、結局愛知大学には12年間いた。文系の学問の実態がよくわかって、とても参考になった。懇親会では、研究担当副学長の挨拶のあとで、私が乾杯の発声をした。司会者に何か一言話すようにと言われたので、大筋以下のような話をしたように思う。突然の指名で、原稿はなく、思いつくまま話したので、ここですこし手を入れて、正確にまとめておく。

「いま物理学の副学長先生から歓迎のご挨拶をいただきましたが、物理学と地理学は正反対な学問であるように思います。物理学は少ない原理で多くのことを説明する学問ですが、地理学は多くの情報を集めてたった一つのこと「地域」しか説明しません。私は学生の頃、こんな地理学は科学とは呼べないのではないかと真剣に悩みました。でも歳を重ねた今では、これから学問で生き残れるのは物理学と地理学だけではないかと考えるようになりました。物の^{ことわり}理と地の^{ことわり}理です。

最近話題の村上春樹の小説『騎士団長殺し』には、彼が得意とするセックスはもちろんのこと、東北大地震、音楽、絵、車、お化け、即身仏、アイデア、霊と魂、意識、哲学、第一次情報、主観と客観、スピリチュアルな存在など、ありとあらゆるものが詰め込まれています。誰が読んでもその人なりに楽しめるように書かれています。彼はこの小説で、多

くの情報から一つのこと「人間」について何かを言いたいのです。地理学とよく似ています。

地域には人間が暮らしています。自然的情報と人文的情報を統合して、地域に暮らす人間について研究する学問が地理学である、と私は近ごろ考えるようになりました。地域性とは風土性のことです。これからますます必要になる物理学と地理学の更なる発展を願って乾杯したいと思います。ご唱和ください。乾杯！」と。

中央公園で、このように、昔のことを、いろいろと思い出しながら散歩してから、斜め向かいのQ 't店（キュートという名の複合商業ビル）へ行って、店内を一回りした。西武デパートが撤退してから、人が集まらず、つくばの中心部の店はどこもさびれている（イーアスは大繁盛なのに）。店内の一階のかなり広いスペースを使って、古いレコードやCDを売る店が出店していた。ひやかしにクラシックのCDコーナーをのぞいてみたら、バッハ全曲集 142 枚が 1 万円で出ていた。カバーの封は切ってなく、新品らしい。箱の裏には 2014 Brilliant Classics と印刷してある。換算すると 1 枚 70 円にしかならない（だいたい日本のCDが高すぎるのだが）。遊行期に入り、ちょうどバッハを聴きたいと思っていた時だったので、（数枚は持っているが）すぐ買う気になった。でもイーアスで本を買ったばかりで、財布の中の現金では足りない。古物商の店でカードは使いたくないし、そもそもカードは受けつけないだろう。私はそのCDをアルバイトの店番の若者にあずけてから、現金をとり急いで施設へ戻った。そして現金で支払いをして、そのCDを受け取った。

私は施設で水彩画を習っている。絵を観るのも好き、音楽を聴くのも好き、室生寺の十一面観音はものすごく好きだ。「好き」という感情に理屈はいらない。クラシックではモーツァルトが特に好きで、レコードとCDを合わせれば、小曲をのぞいてほぼ全曲ある。Jポップスでは伊東ゆかりのファンで、コンサートにも何回か行った。演歌も嫌いではない。ちあきなおみのCDは見つけ次第買った。大月みやこのあの声は彼女にしか出せないのではないか。佐村河内守の交響曲第 1 番に騙されたこともある。クラシック以外のCDは車の中で聴いている。絵ではクリムトが一番好き。

ウィーンで学会があった時に泊まったベルヴェデーレ・ホテルで夜小さな火事があり、屈強な消防士が大勢ホテルへ来た。日出は彼らの頑強な体に驚いていた。小柄な私と比べていたのであろう。家に帰ってからもウィーンの消防士の話を何回もした。芸術の都の 1 週間はすばらしかった。クリムトも、オペラも観たし、街歩きもした。ある日二人で学会をさぼって、ザルツブルクまで足を延ばしてモーツァルトのにおいもかいだ。もう一度ウィーンへ行きたいが、たぶん無理だと思う。

上村松園、棟方志功、草間彌生、村上隆、奈良美智など、好きな絵は挙げればきりがなし。秋に東京へくるとい話題の池田学のペン絵はぜひ観たい。ジブリも好きだ。「この世界の片隅に」は 4 回も観た。過日弥生美術館へ原画展を観に行き『日出処の天子』全 7 巻を売っていたので、施設へ宅配してもらった。聖徳太子については、「聖徳太子はいな

かった」という学術書(?)よりも、「聖徳太子は同性愛者だった」という山岸涼子のこのアニメ『日出処の天子』の方が好きだ。

私は自分がアート好きであることもあって、このごろアートとは何だろうと考えることがよくある。そして最近になって到達した結論は、旅と同じく、アートもネグントロピー源ではないのか、という仮説である。私は作家ではないが、村上春樹氏と同じく、文章を書くのが好きだ。これまでに頼まれた原稿を断ったという記憶がない。重い鬱状態のときには、書けずに苦しんだことが何回かあるけれども……。私は頼まれた原稿を書き上げると、いつも20畳の居間の大きな丸テーブルの椅子に二人で並んで腰かけて、日出に読んで聞かせ、彼女の意見をうかがった。たいていは「よくできました」だったが、ときどきは自分の意見をいってくれた。日出はとてもいい相棒だった。あるとき彼女に「あんたはもう十分に耳学問をしたから、ぼくの学位をあげてもいいよ」といったことがある。いまごろ彼女は、「パパ、わたしはまだ学位記をもらってないんだけど……」と、牛久浄苑の墓の中でつぶやいているかもしれない。(付録の「水文学の未来」と「水循環と社会」はこの施設入居後に執筆したもので、日出はすでに耳が聞こえなくなっており、読んで聞かせることが出来なかった。ここに印刷して仏前に供える)。

日曜日の読書欄に高橋順子『夫・車谷長吉』(文藝春秋、2017)の紹介記事があったので、月曜の朝一番でイーアスの3階へ求めに行った。「赤目四十八滝心中未遂」は小説も読んだし、映画も何回か観た。赤目四十八滝へも一度行ってみた。寺島しのぶ演じる綾の背中の^{かりょうびんが}迦陵頻伽の刺青がすごかった。他にクリスティン・ヤノ『ハローキティ』(作品社、2017)、川上弘美『ぼくの死体をよろしくたのむ』(小学館、2017)、上野誠『万葉集から古代を読みとく』(ちくま新書、017)、『美術手帳7月号』の5冊で計9828円を支払う。もらってきた『青春と読書7』を読んで、原田マハ『いちまいの絵』も買わなければと思う。

長吉は二階の書斎で原稿を書き上げると、それを両手に持って階段を下りてきた。「順子さん、原稿を読んでください」とうれしそうな声をだして私の書斎をのぞく。私は何をしていても手をやすめて、立ち上がる。食卓に新聞紙を敷き、その上にワープロのインキの匂いのする原稿を載せて、読ませてもらう。

さすがに詩人の文章である。絵を観るようだ。詩人順子と私小説作家長吉は、主婦日出と科学者勇の関係に似ていると思った。

いま私は「聞き役」であった日出の役割を、ある方に「読み役」に代わってもらって、私が書いた原稿の(日出に代わる)「最初の読者」になってくださるようお願いしている。そして、私が書いた原稿「1. 山陰旅」を読んでくださったその方から、「ネグントロピー源という言葉の意味がよく分かりません」という質問があった。

それで、WEBのアウトプットをプリントアウトして、それを返事に代えようと思い、「ネグントロピー源」で検索してみたら、自分が書いた論文「水循環と社会」(付録参照)の全文が出てきて、とても驚いた。怖い時代になったものだ。政治家にならなくてよかったと思う。この論文は編集委員長からの要請があり、この施設に入ってから執筆したもの

である。以下に「アートはネグントロピー源なり」という仮説についての私の考えをわかりやすく述べてみたい。いま1万円で購入してきたあのCDの10枚目を聴きながら、PCのキーボードを打っている。曲目はPARTITA NO.3 IN E BWV1006である。全曲聴き終るまでに何カ月かかることやら。でも、遊行期に入った私には時間の制約はなくなったから、何カ月かかってもいっこうにかまわない。

「自然界は、私たちの体を含めて、秩序に満ちています。この秩序はどうして生まれたのでしょうか。秩序のある状態がエントロピーの低い状態で、秩序の乱れた状態がエントロピーの高い状態です。熱力学の第二法則には、「閉じた系のエントロピーは一方向的に増大する」とあります。閉じた系とはエネルギーや物質の出入りがない系のことです。これは物理法則ですから、例外はありません。秩序だった状態も、放置すれば次第に乱れて、秩序がなくなります。手を加えなければ、その逆が起こることは決してありません。

汚れた皿を水で洗えば、皿はきれいになります。水は汚れます。皿はエントロピーが低くなり、水はエントロピーが高くなりました。しかし使った水が消費されたわけではありません。菅原正巳先生は、この過程について、水はネグントロピー源としての役割を果たした、と考えました。水が持っていたネグントロピーの効果で、皿はきれいになったのです。水はネグントロピー源なのです。

とても短くまとめましたが、これが菅原先生の「水のネグントロピー論」です。くわしく説明した著書も出ていましたが、出版元は解散したので、いま入手できるかどうかはわかりません。エントロピーについての物理の一般人向けの解説書はたくさん出ています。

(私は、菅原先生が東京教育大学大学院の非常勤講師を務められたときの担当助手でした。菅原先生は、東大の物理学科の出身で、つくばの防災科学技術研究所の所長も務められました)。

エントロピーと情報は、数式で物理的に定義すると同じ形式になります。ただし符号は逆です。表現形式の一致は単なる偶然ではありません。わかりやすくいうと、負のエントロピー(つまりネグントロピー)が情報であり、エントロピーが負の情報なのです。したがって、情報を獲得すれば秩序が生まれることになります。きれいになった皿は、水から情報をもらったと同じことになります。

ある物理学者は、人の情報に対する欲求は、性欲や食欲と同じく根源的なものだといいます。性欲や食欲がある理由は誰にでもわかります。私はこう理解しています。「性欲は(男も女も)自己の遺伝子を残すためにあり、食欲は体内で(必然的に)発生して増加してしまうエントロピーを低めるためにある」と。体内のエントロピーの増加がある段階を超えると人は死ぬ、と私は考えています(ただし私は医者ではないので、これ以上のことはわかりません)。人は死んだあとにも自分の子孫を残したいし(性欲)、何よりも死にたくないのです(食欲)。では、情報欲はなぜあるのでしょうか?人は(何らかの)秩序を築くために情報を欲しがるともかもしれませんよ。体内のエントロピーが増大して、秩序が乱れて死ぬことのないように。でも理屈はともかく、人は必ず死にます。私はもう遊行

期に入ったので、死は少しも怖くありませんが。

水循環は水という物質と同時に情報も運んできます。情報を獲得すると秩序が生まれます。さらに、最新の脳科学の成果によると、情報を統合すると意識が生まれるそうです。「水循環が運ぶ情報の効果として自然界の秩序が生まれる」と考えることはできないでしょうか？

でも、人に情報を与えてくれるのは水だけではありません。私が描くへたくそな水彩画も、バッハのパーティータも、室生寺の十一面観音も、情報を与えてくれます。私が「アートはネグントロピー源なり」という仮説を考えたわけがお分かりいただけたでしょうか。パブロ・ピカソも「芸術は、日々の暮らしで心につもった埃を払い落してくれる」といったそうです。埃はエントロピーです。

私は、水循環に恵まれた日本という国は情報大国だと思っています。だから日本の文化は素晴らしいのです（和牛や、林檎フジや、新潟の枝豆を含めて）。ようやく世界の人々もこのことに気づき始めたようです。「好きな」アートと関係をもつことで気分がよくなったとしたら、あなたの体のどこかの秩序が整ったからとは考えられませんか？ 医学者ではない私には、どこの秩序が整ったのかはわかりませんが……。」

あらゆる法則も、証明されるまでは仮説でした。仮説は反証可能性をもたなくてはなりません。これはポパーという人の考えです。私が考えた「アートはネグントロピー源なり」もまだ仮説です。私が生きているうちに証明されることは多分ないと思いますが、でも、生きているうちに反証を提示する人が現れる可能性は否定できません。そうなったら、そして私がその反証をもっともだと認めたら、私はこの仮説を取り下げます。そしてその時、また次のよりよい仮説を考えるでしょう。そうすれば、ボケの進行を少しは遅らせることができるかもしれませんから（まだ自分ではボケたとは思っていませんが）。

ボケの人もネグントロピーが不足して脳内の秩序が乱れているのかもしれないよ！

だから、坊さんや、絵かきさんは、長生きする！\$*&#？

薬よりも、モーツアルトやバッハを！??? いや、ジャズや演歌の方がいいかも……
そして念仏や読経も。

3. 遊行期の東京での一日

行くたびに東京の街はきれいになる。オリンピックを目指してただいま改造の真最中だ。やがて東京は世界一きれいで面白い大都会になるだろう。7月9日の産経日曜版「アート美」の「不染鉄」展を読んで、11日朝、東京ステーションギャラリーへ足を運んだ。行きのつくばエクスプレス（TX）の冷房が効きすぎていて、むき出しの半袖の腕が寒くて困った。半袖では乗り物に乗らないできた私にとっては、久しぶりの感覚だった。

ある夏、日出に留学先だった大学とカナダという国を見せようと、二人で飛んだバンクーバー行きながら空きの機中が寒く、毛布を借りて包まって眠ったのだが、私だけが風邪をひいてしまった。その後の1週間のバンフ→ナイアガラ滝→ケベックなどを回ったカナ

ダ気まま旅の楽しみが半減したことを思い出した。ペナンへは長袖で行かなくてはと思う。

不染鉄は東京の寺で生まれ、世を半分捨てたような暮らしを奈良で送り、薬師寺東塔、民家、かつて暮らした大島の風景などを描き続けた「幻の画家」といわれる人である。彼はある人に「いい人になりたい」と書いた絵手紙を送っている。84歳、今の私と同じ歳で死んだ。晩年の静かな心境が表現されたいい絵がたくさん展示されてあった。いい絵はいい人にしか描けない。また重い画集を買ってしまった。そのあと六本木のミッドタウンへ行って、鈴波で銀だら定食をたべ、近くの店でコーヒーを飲んだ。いつものコースだが、どちらにも満足。鈴波は名古屋の店で、12年間も名古屋でホテル暮らしをした私はよく通った。東京にある店はここだけである。

ミッドタウンのサントリー美術館で「神の宝の玉手箱」を観る。六本木開館10周年記念展で、国宝〈浮線綾螺鈿蒔絵手箱〉修理後の初公開である。このような職人技が現在の日本の工業技術の基であることを改めて感じる。注文した日出の輪島塗の蒔絵のお厨子はどこまで出来ただろうか。一周忌に間に合うといいのだが。売店で「水—神秘のかたち」の図録を見つけて買う。重い図録が2冊になってしまった。この「水」の展示があったのは2015年12月から16年2月までで、ぜひ観たかったのだが、当時の日出の病状を考えて断念した経緯がある。ここで図録が買えたのは幸運だった。図録の50ページに竹生島弁財天像の写真が載っていた。弁才天の祖先であるサラスヴァティー河を求めて、インドを何回も訪れた私にとっては、この図像だけで購入した価値がある。

その後で国立新美術館の「サンシャワー：東南アジアの現代美術展」を観ようと思って行ったら、火曜日は休館。でもこの展示は10月23日までだから、またいつでも来られる。乃木坂駅で千代田線に乗るつもりだったが、駅前のTOTOギャラリーで「SHIGERU BAN: PROJECTS IN PROGRESS」をやっていたので寄ってみる。坂茂は感性豊かな建築家だ。

(つくばの中心部を設計した)磯崎新の事務所で働いたこともあるようだが、権威主義の磯崎とは哲学がちがう。坂のつくる建物は、外観がやわらかくて、自然とは調和的。日本の建築家が世界で活躍できる背後には、その建築家を育てた日本という国の風土性が関係しているのであろう。偶然の出会いだったが、いいものを観させてもらった。

メトロに乗って、6月29日に銀座三越では売っていなかったスリッポンを探しに銀座シックスへ行く。5階のパラブーツという店に、素足で履ける手頃なものがあって購入した。「夏物バーゲン品で2万円です。だから返品はできませんが」と店員に言われ、OKと返事する。色は5色あったが、青を選ぶ。ペナンでの遊び靴だ。志野が来た時に見せたら、スペイン製のいい靴だという。確かにスペインの革製品はしっかりしている。日出と一緒に遊んだスペインで買ったベルトを私はまだ使っている。夜セビリアのホテルを二人で抜け出して、裏町の小さな舞台上でフラメンコを観た。目の前で踊り子が踏み鳴らす靴音が大きかった。日出はとても喜んでた。

そのあとが本日の予期せぬハイライトとなった。銀座駅で日比谷線に乗り、秋葉原で降りて軽くパン食をしてから、TXに乗るつもりだったが、地下鉄車中でハッと気が付き、

(これまで何回も食べ損ねていた)「いきなりステーキ」で今日こそは食べてみるぞ、と意気込んで北千住まで行った。客が注文できる肉の量は最低が 200 グラムで、肉の重さを目の前で測ってくれる。1 グラム 9 円。ヒレ 200 グラムでレアを注文する。店は立食だから安いのだと聞いていたが、2 階の椅子席へ案内される。自家製のタレは小型の魔法瓶に入っていて自分でかける。すべてが合理的。ごはんとサラダとノンアルコールビールを別に注文して、支払いは合計 2813 円也。先日つくばのステーキ店でほぼ同じ値段で食べた 150 グラムのステーキと比べると、格段にうまいし、量は多い。はやるわけだ。

「いきなりステーキ」の商法は、シティホテルとビジネスホテルの間を狙って大成功した(と私は考える)APAホテルに似ているように思う。APAには一度だけ泊まったことがある。北千住の店内には、時給 1300 円、店長見習い月給 40 万円以上、これから 100 店舗を増やす計画、など書いた求人広告のビラが貼ってあった。安さと便利さを狙ったコンビニ商法とは明らかに違う。創業者の声で、お客を勧誘するテープが、店内のスピーカから流れていた。ビジネスの世界にもまだニッチはあるようだ。施設を朝 8 時半に出て、帰ったのは夕方 7 時半。疲れたが、ハプニングと実りの多い 1 日だった。

翌日、イーアスの本屋から大平裕『天照大神は卑弥呼だった』(PHP、2017)入荷の電話があった。出雲神話の実在性を確信した私のところへ、今度は古事記神話の実在性について語る本がとどいた。ほぼ読み終えた『観光客の哲学』、『ハローキティ』、そしてこの『天照大神は卑弥呼だった』の 3 冊で、これから当分は楽しめそうだ。この 3 冊を私の風土論とどう繋げることができるかは、これからの楽しみ。他に店頭で見つけた近藤龍一『12 歳の少年が書いた量子力学の教科書』(ベレ出版、2017)も、遊行期を「量子力学で遊ぶ」のに役立つそうだから買う。脳を休めるためのやわらかい本としては、花房観音^{いろぼけ}『色仏』(文藝春秋、2017)を先週買った。

偶然か、必然か、5 月の山陰旅で出雲神話の実在性を実感してきた私が、7 月に古事記の神代を事実として語る『天照大神は卑弥呼だった』を読んだ。読み終えて、著者の主張は筋が通っていると思った。この本の参考文献によると、安本美典はすでにこの説について、『倭王卑弥呼と天照大御神伝承』(2003)と『新説邪馬台国 天照御大神は卑弥呼である』(2009)の二書を出しているので、これはもう「新説」とは言えない。これが「新説」だったころ、私は愛知大の COE で忙しく、その後は日出の介護で古代史にかかわっている暇はなかった。最も私の専門は古代史ではないので、別に知らなくても非難されることはないのだが。

これまでいつも私は、出雲神話や古事記神話に出てくる長い神々の名前を読むたびに、作り話でこんな長い名前がつけられるだろうか、人々はなぜそんな名前を代々語り継ぐことが出来たのだろうか、と不思議に思っていた。何かはその背後に隠されているのではないかと。津田左右吉を代表とする敗戦後の歴史学者は、神話は絵空ごとだと片づけた。彼らは「情報」というものが、いろいろなかたちで伝わることを知らなかったのだ。「情報」は文字として以外にも、語り、絵画、歌舞、人間が作ったモノなど様々なかたちで後

世に伝わる。要は、それらの情報を読み取る力があるかどうかだ。この本の著者はその能力を備えていると私は思った。でも、小林恵子『古代倭王の正体——海を越えてきた覇者たちの興亡』（祥伝社新書、2016）は、中国や朝鮮の漢字古書籍の解読から、卑弥呼が統治する邪馬台国は奄美大島にあったと主張しているから、たぶん古代史論争はまだ完全決着はしていないのであろう。

4. ペナン旅の前日に考えたこと

先日買ってきた本、セザー・ヒダルゴ『情報と秩序』（早川書房、2017）の原題は WHY INFORMATION GROWS The Evolution of Order from Atoms to Economics, 2015 である。本書の主たる目的は（私とは直接関係のない）経済であるが、訳本のタイトルは私には魅力的である。

「私は情報がすべてなのだと認めざるをえなくなった」と書くヒダルゴは、「本書の最初の数ページを書いたのは、2012年10月2日だった」という。私は愛知大のCOE 後半の2005～06年頃に「情報」の重要性に気づいた。そのことは愛知大COEで印刷した『現代中国環境基礎論』（2006）に書いたし、ノンブル社の『自然といのちの尊さについて考える』（2015）の中にも「自然と人間のかかわり」という題でまとめておいたが、水文学の立場で公にしたのは2013年に産総研で行った地下水ネットでの講演が最初である。「万物の源は情報であり、その情報を持続的に供給するシステムが水循環である」という言葉が『榎根勇先生御講演集』（地下水技術協会創立50周年記念出版）の冒頭に印刷されたのは、2015年10月2日であった（奇しくも月・日がヒダルゴと同じである）。私とヒダルゴは、ほぼ同じ時期に、ほぼ同じことを考え始めたことになる。二人ともジェイムズ・グリック『インフォメーション』（新潮社、2013）の影響を強く受けている。ヒダルゴは私より47歳も若い、物理学で博士号を取得した情報の専門家であり、情報については私よりもはるかに厳密な記述をこの本の中で行っている。私にとって参考になった箇所を以下に抜粋してみる。

・情報の進化はいかなる境界をも超え、経済や社会の生み出す情報にまで及ぶ。情報を物理的秩序という広い意味で理解するとすれば、私たちの経済が生み出すのは情報にほかならない。いやむしろ、生物細胞であれ、製造工場であれ、私たちの生み出すものすべてが情報なのだ。なぜなら、情報はメッセージに限られないからだ。情報は、私たちの生み出す物理的なモノすべてに内在する。

・エントロピーと聞いて無秩序を連想する人も多いと思うが、エントロピーは必ずしも無秩序の尺度ではない。エントロピーはある状態の多重度（同等な状態の数）を測るものである。ただし、無秩序な状態というのは多重度が高いことが多い。したがって、現実には、エントロピーの高い状態というのは無秩序である可能性がきわめて高い。そのため、無秩序とエントロピーを同一視するのは、あながち悪い単純化とはいえない。

- ・ボルツマンの最大の成功は、多数の粒子からなる系はなるべく情報の少ない状態へと向かう傾向がある、ということを示した1878年の論文だった。この法則は熱力学第二法則と呼ばれ、その数十年前にルドルフ・クラウジウスがもう少し複雑な定式化を用いて予測していた。熱力学第二法則とは、閉じた物理系のエントロピーは常に増加する傾向にある、というものだ。つまり、系は秩序から無秩序へとひたすら行進を続けるのだ。
- ・プリゴジンは実に多くの重大な発見をしたが、本書で注目するのは、「非平衡の物理系の定常状態のなかで情報が自然と発生する」という考えである。
- ・プリゴジンは、ボルツマンの理論は正しいものの、地球で観察される現象には当てはまらないことに気づいた。地球は、平衡に向かってまっしぐらに突き進む巨大な系——つまり宇宙——の内部にぼっかりと存在する、非平衡系のポケットだからだ。実際、地球はいかなる平衡にも近づいてこなかった。地球の内部で起きている核崩壊と太陽エネルギーが、地球を平衡から引っぱりだし、情報が生まれるのに必要なエネルギーを与えている。いわば地球は、宇宙という不毛な荒野のなかにある小さな情報の渦なのだ。
- ・プリゴジンが画期的だったのは、非平衡系の挙動をつかさどる数学的な法則や原理をいくつか導き出したことだった。彼の研究は、宇宙が特殊な方法で組織化されており、混沌の反対側に情報が潜んでいることを証明した。
- ・地球のような非平衡系では、情報の発生は予期されている。
- ・1947年、プリゴジンは非平衡系の定常状態がエントロピーの生成を最小にすることを示した。つまり、非平衡系は、秩序が自然に発生し、情報の破壊を最小化するような定常状態へと自己組織化されるのだ。
- ・情報の永続性や進化にとって固体が重要である。
- ・生命という現象は、生体分子の非周期性とその固体性・結晶性の両方に依存している。非周期性の分子が情報を具象化するのに欠かせない条件であり、分子の固体性はその情報が持続するのに欠かせない条件だった。
- ・物体の固体性があるからこそ、私たちは低コストで情報を蓄積できる。固体がそのなかに格納された情報をエントロピーの魔の手から当面のあいだ守ってくれる。

この本を読んでから、いつものように森のまわりを散歩しながら、「万物の源は情報であり、その情報を持続的に供給するシステムが水循環である」という自分の言葉について考えていた。そして、改めて気づいたことが三つある。第一は、「情報がすべて」と「万物の源が情報である」は同じだということ、第二は「すべてが情報」だから「水はネグエントロピー源」でもあるということ、第三は、水は液体であるが故に、流動性があり、情報をほかに移すことができるということ。固体である水（氷）は、情報をほかに移せないから古気候情報を何万年も保存することができたのだ。私は自分の言葉を修正する必要はないと思った。

結局、菅原先生も私も、「人は必ず死ぬ」と同じような当たり前のことに気付いただけ

だったのだ。当たり前のことは、間違っただけではないが、科学的な仮説とはいえない。

このことが分かって霧が晴れた。もう心おきなく死ぬことができる。ここで以下に再々度、ヒダルゴの言葉を参考にして、「ネグントロピー源」についていま私が理解している範囲でより正確でやさしい解説を試みる。

「情報に姿かたちはありませんが、世界は情報のやりとりで動いています。それは万物の源が情報だからです。情報は太陽エネルギーの作用で生まれ、水循環によって地球上にばらまかれます。地球は情報の生まれる奇跡の星です。エントロピーとは無秩序のことだと考えてほぼ間違いありません。でたらめさの程度の大きい（無秩序の）状態がエントロピーの高い状態で、でたらめさの程度の小さい（秩序のある）状態がエントロピーの低い状態です。閉じた系では、エントロピーは一方向的に増大する傾向にあります。

物理的な定義では、エントロピーと情報は同じ数式で表されます。ただし符号は逆です。つまり負のエントロピー（ネグントロピー）が情報なのです。情報を獲得すると秩序が生まれ（エントロピーが減少）します。さらに情報を統合すると意識が生まれます。水は流動性のある情報です。流動性のある水は、重力の作用で様々なところへ流れて行き、多様なプロセスを介して情報をほかに移し、多様な秩序をつくります。地球上に見られる多様な秩序は、水の作用で生まれたものです。

アートも情報です。音楽は音波で伝わる情報で、絵は光で伝わる情報です。演劇は、音楽や映像やせりふの組み合わせられた複合的な情報です。モノも情報ですが、固体の中に閉じ込められた情報には流動性がありません。旅も情報です。巡礼はどここの国でも行われています。アートや巡礼は、進化しすぎた現生人類が、体内で発生するエントロピーを低下させるために考え出した普遍的な手段、つまりネグントロピー源なのです。

人間が活動すると体内でエントロピーが発生します。体内のエントロピーがあるレベルを超えると人は死にます。人体にとっては、エントロピーはストレスとほぼ同義です。人は病気で死ぬのではありません。病気は、原因であるというよりもむしろ結果です。ストレス（エントロピー）がたまるから病気になり、そして死ぬのです」と、以上。

5. ドリアン旅（2017年7月）ペナン

私の主たるフィールドは亜熱帯から熱帯にかけての南アジアである。マレーシア人は果物の王様はドリアンだという。「マレーシアの男はサルーンを質に入れてでもドリアンを食べる」と何回も聞かされた。サルーンはスカートのように腰に巻く一枚布だ。一方、スリランカ人はマンゴーが王様だという。「屋敷内に大きなマンゴーの木が一本あれば、それだけで暮らしていけるよ」と言ったスリランカ人もいた。大きな木なら一本に1000個以上のマンゴーが生る。ドリアンもマンゴーも現地で熟したものを食べれば、とてもうまい（ただし、どちらも種類は多いからご用心！）。しかし残念ながらドリアンにはゴミが腐ったような特異な臭いがあり、その臭いが強すぎて、ホテルへの持ち込みは禁止されている。だから本当においしいドリアンを食べた日本人は少ないと思う。かりに銀座の千疋

屋から一個 1 万円で買って来たとしても、現地で食べる味とはほど遠い。

1974 年 6 月に、家族と一緒にシンガポールに赴任した。学年末の 3 月だったと思うが、突然町田貞教授に呼びだされて、「樞根君、シンガポールに行ってくれないか。イエスかノーか今すぐ返事してくれ」と言われた。当時東京教育大学は筑波移転問題でもめにもめていた。文学部の多くの教授が筑波移転反対派だった。彼らの口実は「古本屋のない場所では文系の研究はできない」だった。その混乱のさなかに町田教授が理学部長に選ばれてしまった（後に町田教授は筑波大学の副学長になった）。しかし町田教授は、すでに国際交流基金から派遣されてシンガポールの南洋大学へ 1～2 年間教えに行くことが決まっていた。相手校の授業科目を含めて、すべての手続きは終了していた。代わりに誰かが行かなければならない。私はしばらく考えてから「はい行きます」と答えた。実は町田先生と私は、所属講座は違うが、これから述べるように、かなり深い関係にあった。とうきゅう環境財団の社会貢献学術賞授与式の講演記録の中で少しだけ触れておいたが、ここで改めて、日出を含めたきちんとした記録を残しておくことにしたい。

私は日出と大学院博士課程 2 年の大学院生だった時に結婚した。（義理の）いとこ同士という気安さもあったからだが、経済的には苦しかった。日出は新潟から出てきて無職、私は家庭教師のアルバイトと奨学金以外は無収入だった。西武線の桜台駅近くにあった、普通の家の狭い庭に面した鍵型の三畳二間を間借りして新婚生活を始めた。遊びに来た友人は「この家は寝れば隅から隅まで手が届くから便利だ」と言って笑った。

そもそも私は、学問への情熱に燃えて大学院を受験したのではなかった。学部 4 年の時にある女性に真剣な恋をした。（真剣さの強さという点で）初恋といってもいいかもしれない。日出とはまだ淡い関係のままだった。その初恋の女性の近くに居たくて、大学院を受験したのである。ところが、大学院の入試には合格したものの、その女性には見事にふられてしまった。もう東京にいる必要はなくなった。私は大学院へは進学せずに、田舎の教師になろうと思った。そのころまだ教員採用試験など行わない県も多かったように思う。私は同窓会である茗溪会の就職担当係のところへ行って、「どこか田舎の高校の教師の口を紹介してください」と頼んだ。係の人はその場で、北陸地方のある県立高校を紹介してくださった。私は、「よろしく申し上げます。教授の許可をもらってからまた来ます」といって茗溪会館を出た。本気でその高校へ赴任するつもりだった。

翌日まず、大学院で専攻する予定だった気候学講座の福井英一郎教授の研究室へ行って、「大学院への進学はやめて、高校の教師になりたいと思います」と言った。福井先生はとてもお育ちのいい方で、あまり個人の内面にまで踏み込むようなことはなさない。「よく考えたんだろうね。……どうしても君の決心が変わらないのなら仕方がないね」と了承された。次にクラス担任の三野（石川）与吉教授（地形学講座）の研究室へ行って同じことをいった。「理由は何だ」と聞かれたので、「失恋しました」と答えたら、「バカモン！」と一喝された。「お前の身はもうお前ひとりの身ではない。頭を冷やして出直してこい！」と追い出された。（受験科目は外国語 2 か国語と専門科目、それに面接だった。私は英語と

ドイツ語を選んだ。後で知ったことだが合格定員4名で、私の成績は2倍以上の倍率の受験者の中で一番だったらしい)

三野先生が福井先生と同じように簡単に了承されたら、いまの私も、私と結婚した日出もいなかった。したがって二人の娘も.....孫たちも.....。人の死は必然だが、生は偶然である。三野先生のこの時の「バカモン！」を片時も忘れたことはない。人を指導するとは、こういうことなんだと思う。人は誰でも、若い時に、他人に話したくないことを沢山やっている（でも、失敗がなければ進歩はない）。この失恋の話は日出には（まだ）内緒だ。あの世で会うことが出来たら、その時に話す。

紆余曲折はあったが、気候学講座で修士論文を書き、博士論文もほとんど書き終えた頃、日本学術振興会の（今でいうポストドク向けの）新たな奨学金の募集があった。院生時代の奨学金よりも金額が多く、研究費も付いている。その奨学金に採用されて、日出（依然として無職）と共に手を取り合って喜んだ。私という研究者は、日本国の税金で育てられた。その奨学金をもらっている期間中に、ドイツ留学中の気候学講座の吉野正敏助手が留学2年目に入った。当時の規則では、留学は1年限りで、2年目からは休職扱いになり、休職中はそのポストで臨時的に人を採用できる。吉野先生が帰国されたら退職するという条件で、私は1年間の期限付き助手に採用され、はじめて国家公務員というものになった（この文章を書いている時に、吉野先生が89歳で、脳幹梗塞で亡くなられた、合掌）。

1年なんてあっという間に過ぎる。それを心配されて、情報通だった気候学講座助教授の関口武先生が、「いまカナダ政府が国費留学生を募集しているから応募してみたらどうか」と勧めてくださった。運よくその留学生試験に合格したので、私は、退職して1963年の夏からバンクーバーのブリティッシュ・コロンビア大学へ留学しようと考えた（留学後のことや、日出とのことは、出たところ勝負で考えれば良いと思っていた）。これで吉野先生が帰国されたときに無職になる危機は避けられると思った。ところがこの年に、東京教育大学理学部地学科地理学専攻に新しい水の講座が「併設」され、5講座制になることが決まったのである。東京大学理学部地理学教室はまだ2講座制だった。

そして、カナダ留学の準備をしている最中のある日、私は町田先生に呼び出され「榎根君、留学するのがいいか、それとも新設される水の講座の助手になるのがいいか？」と問われた。私はしばらく考えて、「両方実現できたらいいのですが」と答えた。この講座新設のために奔走されたのは、あの三野先生だった。

当時、日本は高度経済成長が始まろうとする時期だった。経済活動には水が必要である。しかし、水を理学的に自然現象として研究する講座は日本の大学にはない（外国の大学にもなかった）。そのころ日本でも、外国でも、「水文学」は土木工学科の教科で、ダムや堤防の設計に必要な確率雨量や確率流量を計算する補助的な教科にすぎなかった。三野先生は、それでは駄目で、自然界の水を理学的に研究する講座が日本には必要であると考えておられた。三野先生は東京教育大学の評議員を務めておられたので、その立場を活用して文部省や経団連などに行かれ、自然界の水の基礎的研究の必要性を説いて回られた。新設

講座が「併設」となっていたのは、将来は地理学教室から分離して、独立した陸水学科を設立する目的があったからである。陸水学や水文学に関しては、話せば切りがない。内容が専門的になりすぎるので、ここではこれ以上は触れない。

もちろん町田先生は、三野先生の指示で「留学か、助手か」私の意向を確かめにこられたのである。教授に新任予定の山本荘毅先生はまだ農林省におられて未着任だった。教授間でどのようなやりとりがなされたのか、私は全く知らない。三野先生は、私の厚かましい「両方とも」という希望を受け入れてくださり、助手の身分のままで（国家公務員として）留学して、帰国したら水の講座の助手になるようにといわれた（と町田先生を介して知った）。旅券は公用旅券だった。気候学講座の助手として留学し、帰国して水の講座の助手になったのであるが、人事の帳簿の上でどうなっていたのかは知らない。

カナダの国費留学生の旅費条件は、カナダまでの旅費は自弁で、帰国時の航空券はカナダ政府が購入して支給するというものだった。日本からカナダまでの航空機代は片道 20 万円だった。当時の助手の給料は 2 万 2000 円位だったと思う。太平洋を貨物船で渡る安い方法もあったが、私たちは共済組合から 20 万円を借金し、2 万円ずつ 10 カ月月賦で返した。妊娠中だった日出は、新潟市金衛町の彼女の実家へ一時的に戻り、月賦を払った残りのわずかなお金で暮らした。その間に長女志野が生まれた。日本はまだ貧しかったが、いくつかの幸運と周りの人たちのご好意に助けられて、私の留学は実現したのである。

このような経緯を経て、私は 1964 年にカナダ留学から帰国した。以後、新設された水収支論講座の山本荘毅教授の助手として 8 年間仕えた。講座制という制度は、封建的で、理不尽な制度である（だから筑波大学では講座制は廃止された）。上が空かなければ下の人は絶対に上がれない（万年助手という言葉もあったように）。この間に、私の後輩はずでに他大学の教授に昇進していた。私にも何回か話があったが、外へ出してもらえない。そろそろ潮時だなどと思い、ある私立大学からの話もあり、山本先生にもう辞めさせて下さいと申し出た。

すでに述べたように、私は気候学講座の出身であるが、地形学講座の三野先生に指名されて水収支論講座の助手になった経緯がある。三野先生の意を受けて、その指名を私に伝えに来られたのが町田先生だった。私が辞職を申し出たとき、私の博士論文の指導教官だった福井先生が定年退官された後の気候学講座の教授はまだ空席のままだった。そんな次第で、私は 1972 年に、その教授枠で東京教育大学理学部の気候学講座助教授に昇進した。その講座には関口先生が前任助教授としておられたが、長期の海外出張について了承を得なければならない教授という人はいない。昇進後それほど日も経っていないので、まだ学内でたいした役にも着いておらず、町田先生とは専門分野も同じ自然地理学である。英語で講義もできる。以上のようにいろいろな事情があったから、私が呼ばれ、私はその場で即答することができたのである。

娘たちは小学 5 年生と 3 年生だった。家に帰って日出にシンガポールへ行くことを告げ

ると、家族も一緒に行くべきか否かで大騒ぎになった。最後に、かりに学年が1年遅れることになるとしても皆で行こうと腹を固め、家族4人一緒に行くことになった。日出にとっては大きな決断だったと思う。現地では日本人学校に入ったので、帰国時の学年遅れはなかった。我々が着いたとき、シンガポールはドリアンの「大きな季節」だった。12月になると「小さな季節」がくる。ゲテモノ食いの私はすぐにドリアン好きになったが、日出と娘たちはだめだった。でも「小さな季節」がきた時には、彼らも少しは食べられるようになっていた。シンガポールの市場^{いちば}には、ドリアン鑑定士がいた。匂いをかいで合格となったドリアンは値が倍になる。ドリアンの味は当たりはずれが極端だからだ。

家族とは別に、私はインドネシアの他に、スリランカへも、インドへも、度々フィールドワークに行った。スリランカでの調査はキャンディにあるペラデニア大学がパートナーだった。ある時「ドリアンが食べたい」というと、学生たちは大声で笑った。笑った理由を尋ねると、「ドリアンは強壮剤だ」という。シンガポールでそのように言われたことはなかった。フィールドワークの最中だから精力をつけてはいけない、という規則はないはずだ。私は一人でドリアンを食べにいったが、とてもおいしかったという記憶はない。でも、マンゴーがおいしかったという記憶はたくさんある。老人ホームに入って、もうドリアンは食べられないだろうと諦めていた。もちろん性力をつける必要はもうないが、精力はまだ必要である。「死ぬまでにもう一度ドリアンを食べたい」と思っていた。日出と一緒にでなくて残念だが、それが実現できることになって嬉しい。

南国シンガポールでの生活は、楽園にいるようだった。当時のシンガポールは、コンクリートの塊になって大量のエネルギーを冷房で消費する現在のシンガポールとは違って、まだマレーのカンポン（村）が残っているのどかな島だった。大学の宿舎はブキティマの丘の森の中にある一戸建住宅で、家の中は海風が入って風通しがよく、冷房は不要だった。シャワーは水しか出なかったのも、お湯が出るように自費で工事してもらった。お金は（大学の助教授としての給料の他に）国際交流基金から給料以上の額がたんまりと送られてくるし、食べ物おいしい。義務は、赴任した大学で教えることだけ。時間はたっぷりあるが、狭い島で、私のフィールドワークに適した場所はない。旅券は公用旅券で、任地はシンガポール一国だったため、シンガポール国の外へ出るには、対岸のジョホールバルへ食事に行くのにも日本国の許可が必要で、勝手に周辺国を調査することはできなかった。

まだ彼我の給料格差が5倍くらいあった時代では、国家公務員の教員は先進国の大学へ相手国の負担で教えに行けば「2年で家が建つ」と言われた。遊学期に入った私には、これまでは見えなかったことが色々と見えてくる。現在の先進国と途上国の関係も同様で、現在の国連（United Nations、正確な日本語訳は「第二次大戦の勝組の連合国」）の途上国からの職員も、「2年で家が建つ」時代の日本国国家公務員と同じ境遇を満喫している。国連にほんの少しばかり関係した経験から、私は国連が公正な正義の味方であるなどとは全く思っていない。

もう1年シンガポールにいたかったのだが、「筑波大学での水文学科の設立があやしくな

ったから早く帰ってきてください」という後輩からの手紙をもらって、私たちは滞在を1年で切り上げて帰国した。帰国後ブーメランのように、大学での私の所属は気候学分野から水文学分野にかわった。日出は、帰国後「つくば」という新しい土地で悪戦苦闘することになるが、これについては機会があったらまた。

帰国して私の身分は、東京教育大学理学部助教授から筑波大学地球科学系助教授にかわり、1980年に地球科学系教授に昇進した。48歳だった。遅い昇進だったと思う。(アメリカの大学だったならば、私のケースのように、母校に居続けることは許されない。外部からの血を入れなければ、血が濁るからである。今は日本でも公募制が原則になっており、少なくとも制度上は、公平な人事が行われていることになっている。私は、流れのままに生きてきて、こうなってしまったのであるが、母校に居続けたという自分のキャリアについては、少しばかり恥ずかしく思っている)。外の空気を吸ってうまいと感じたのは、退官して愛知大学に移ってからであった。

マレーシアのペナン島にはドリアン・ファームがある。志野の夫のマレーシアの友人が生物系の大学教授で、彼らはその友人とともにペナン島で休暇を過ごしたことがある。今度のドリアン旅は現地を知っている志野が企画してくれた。旅行手続きはまたJTBに頼んだ。しかし志野は休暇がとれず、麻里との二人旅になった。

シンガポールに住んでいた時は、家族でシャングリラ・ホテルへ時々食事に行った。当時のシャングリラはラッフルズに次ぐ高級ホテルだった。志野はペナンでもシャングリラを選んでくれて、安全のため事前に空港からの有料送迎車をホテルに頼んでおいた方がいいと勧めてくれた。その旨をつくばJTBへ依頼すると、「先方にフライト番号など必要な情報は伝えましたから、送迎車の車種を選んで、直接本人からクレジット番号をホテルに伝えて下さい」と、私が連絡する日本語案内の電話番号を教えてくれた。そこへ電話すると「どちらのシャングリラですか」と聞かれた。現在は、東京にもアジア各地にもシャングリラ・グループの施設があるので、東京の総合案内につながったらいい。クレジット番号を伝えて、ベンツEでの送迎を頼んだ。これで万事OKと思ったのだが、ペナン空港には出迎いの車はいなかった。これが今回の旅の唯一のトラブルだった。それ以外はすべて100点満点以上だったのだが……。シャングリラ・グループ内部の連絡の不備を詫びて、ホテルのマネージャーから最後の晩に私たちの部屋へ赤ワインが一本とどいた。

シャングリラ(ShangriLa)は、ジェームズ・ヒルトンの小説『失われた地平線(Lost Horizon)』に登場するユートピアの名称である。この小説の主人公は軽飛行機を操縦していて、シャングリラという僧院が建っているヒマラヤ奥地の谷間に不時着する。霧の漂う調和に満ちたこの谷間に住む人々は普通の人々よりもはるかに長生きである。この小説によりシャングリラは有名になり、1930年代以後、ヒマラヤ奥地のミステリアスな地上の楽園と同義語になった。

南洋大学の宿舎のベッドで私は毎晩この本の英語版を読んだ。格調の高い難しい英文で書かれており、たびたび辞書を引かなければならなかった。愛知大のCOEの現地調査で

中国の雲南省へは4回行った。ネット情報によると 2014 年にシャングリラ市に改名したという雲南省のチベット族自治区のある県へも、2005 年にチベットへ行く途中に寄ったことがある。シャングリラを名乗っている場所はほかにも何か所かあったが、この県はその頃からシャングリラへの改名を目指していた。しかし現地を訪れてみて、私がシンガポールのベッドで抱いていたシャングリラのイメージとはあまりにも違うので、とてもがっかりした。遊学期に入って「理想郷」で泊まれるなんて、我ながら運が強いと思う。

私たちが泊まったペナンのホテルの正式な名称は、シャングリ・ラ ラササヤンリゾート & スパである。メイクベッドのすんだベッドの枕もとには、次のような『失われた地平線』からの一節が印刷された幅の広いきれいな葉が置いてあった。

「その晩、夕食の後、コンウェイはほかの人たちから離れて、月の光の照らす静かな中庭をぶらぶら歩いた。その時シャングリ・ラはとても美しく愛らしかった。あらゆる可愛いものの芯にある神秘に触れたかのように……。コンウェイは、からだはしあわせで、感情は満ち足りており、心は安らかだった……」(拙訳)。

この薄緑色のきれいな葉に印刷してある文章は、4泊した4晩とも違っていた。シャングリラ・グループはこの小説を著作権ごと買い取ったのだろうか……。

ツインベッドの部屋は広さ約 60m²とゆったりしており、ベランダの中央には一辺 2m、深さ 50 cmほどの正方形の大理石造りの風呂が付いていた。風呂に入るときは、リモコン操作でベランダのカーテンが下せる仕掛けになっている。中庭には樹齢 200 年ほどの苔の生えたバニアンツリーの大木が数本、天空を覆うように枝を拵げている。深さの違うプールが三つある中庭は、黄金色の砂浜とフェンスなしの地続きである。タクシーの運転手の話によると、このホテルの敷地はある大金持ちの華僑の持ち物だったらしい。この砂浜はインド洋に直接面しているから、波は力強く砕ける。部屋のベランダから、力強い波の砕ける音が聞こえる。庭には鳥たちがにぎやかにさえずっている。申し分のないリゾート地シャングリ・ラである。

二日目の午前中に、ネットで事前に調べておいたドリアン・ファーム「BAO SHENG」へタクシーで行った。山の中腹にあるドリアン林の中に長机と椅子を並べて、日除けをつけただけの簡易なファームだが、20 人以上は座れそうである。ドリアンの木は水はけのよい土地を選ぶので、山腹斜面が適地である。参考までにお金の話も書いておく。タクシー料金は往復で、現地での待ち時間とチップを入れて 100RM (リングギ)。空港からホテルまでのタクシー・クーポンは 74RM。到着時の換算率は 1 RM が 29 円だった。

ドリアンは筍や枝豆と同じくもぎたてがうまい。バオ・シャンの息子は、もぎたてのドリアンのへたの端を撫でて、自慢気に、「どうだ、ネバネバと濡れているだろう」といった。最初に Red Prawn (紅蝦、105RM) を食べた。そのうまいこと、伝える言葉が見当たらない。ソムリエはワインの味をあれこれ言葉を重ねて講釈するが、しかし結局言葉だけではだめで、自分で飲んでみなければ本当の味は分からない。それと同じだ。これまでドリアンを拒否していた麻里も、ドリアンがこんなにうまいとは知らなかったと、真剣に味

わいながら、一所懸命に食べた。二人とも一個目でほぼ満腹になったが、せっかく来たのだからと二個目の **Green Skin** (青皮、50RM) にも挑戦した。味は少し落ちるが、少し苦みがあって、それなりに美味しい。

三日目は英領植民地の気配が色濃く残るジョージ・タウンの街歩きを楽しんだ。ホテルから街まではバスで小 1 時間。バスの方がタクシーよりも座席の位置が高いので、外の景色を眺めるのに都合がいい。私のペナン旅の目的はドリアンを食べることだけだったが、52 歳とまだ若い麻里は好奇心旺盛で、成田空港で買った旅行案内を読んで、いくつか行くべき場所の目星をつけていた。その第一が、ユネスコの世界文化遺産プラナカン・マンションである。

プラナカンはマラッカ海峡沿岸のペナン、マラッカ、シンガポールなどの都市で土着化した中国系移民の子孫を指し、海峡華人(Straits Chinese)とも呼ばれる。そのプラナカンの大金持の館だった建物がプラナカン・マンションで、海峡華人宝石博物館が併設されている。大勢の観光客がバスで見物に来ていたが、私はこの館で彼らが使用し、また買い集めた陳列物を見て、その物欲の強さにあきれ返った。華人だけでなく、欧米の植民地主義者も世界中で同じことをやってきたのである。この館跡は、モノに憑かれた近代という時代のなれの果ての姿の一つだと思った。モノだけでは人は幸せになれない。

四日目には「818」という名前のドリアン・ファームへ行った。この日のタクシーの運転手は英語が話せて、バオ・シャン以外でも美味しいドリアンの食べられる場所があると案内してくれた。ドリアン・ファームは全部で四か所ほどあるらしい。818では最初に **Tupan King** (リス王、192RM) を食べた。味は紅蝦に勝るとも劣らない。リスはドリアンが大好きらしいが、その王様なら当然であろう。リス王という名のドリアンはバオ・シャンのネットのメニューには載っていなかった。ドリアン一個の値段は、味と目方で決まる。私たちが食べたこのリス王は特に大きく、値も張った。一個食べただけで二人は満腹になり、二日目には挑戦できなかった。帰り道にバティック工場へ寄ってくれたので、190RM で気に入ったシャツを一枚買った。ジョージ・タウンの文化街でも 75RM で一枚買ったのだが、それよりもはるかにデザインがよく布質もいい。

二回とも、私たちの昼食はドリアンだけで十分だった。夕食は每晚ホテルの近くにある **Long beach cafe** という名の屋台街ですませた。マレー系、インド系、中国系の様々な美味しい料理が 10~40RM で食べられる。私たちは最初にインド人の屋台でマトン・カレーのタンドリーを食べた。私は久しぶりに味わう北インドの本格的な味に唸った。福建麺もタンドリー・チキンもインド・カレーもうまかった。でも二日目の晩に屋台からホテルへ帰る途中で、果物屋でマンゴーを一個買おうとしたら、麻里が冷えたほうが美味しいというので、うっかりしてビニール袋の中で冷えていた切り身のマンゴーを買って、店先で食べた。マンゴーはまあまあの味だったが、翌朝起き抜けに激しい下痢をした。私の胃腸は食べ物に敏感で、注意はしていたのだが、久しぶりの熱帯で気の緩みがあり、不用心だった。でも便秘症の麻里は何ともなかったから、強い菌ではなかったようだ。薬は飲まなかったの

に、朝食に気をつかったら下痢は半日で止まった。

以前に日出とジャワ島のソロへ遊びに行ったときも、屋台のようなところで日出がうっかり水を飲んでしまい、下痢をして困ったことがある。私はケニアのナイロビでの国際会議の後、一人で運転手付きのジープを一週間ほど借り上げて、サファリ遊びをしたことがある。このサファリでライオンが自分たちで刈りをした動物を目の前で食べているのを見た。彼らにとっては日常のほんの一部にすぎない。サファリのホテルは五つ星だったので、大丈夫だろうと部屋にあった水を飲み、激しい下痢に襲われ、その下痢が止まらずに往生した。このように外国での下痢の経験は何回かあるのだが、今回は下痢用の薬も持参していなかった。これからは自分が老齢であることを自覚して、万全の準備をしなければ海外旅行はだめだぞ、と肝に命じた次第である。

今回の旅で観光地ペナンの価値を見直した。ペナン島はすでに 13.5 km と 23.5 km の 2 本の長い橋で半島とつながっており、人や物が活発に行き来している。空の便数も多い。島内は建設ラッシュで、あちこちで高層のマンションやホテルが建設中である。ドリアン・ファームや黄金ビーチなど、シンガポールにはないものもある。何よりも地元の人が親切で、観光地ずれしていないのがいい。経済活動が活発で、バブルのころの日本のようだと思った。経済活動の中心は中国からアセアンへ移ったのではないかと感じた。

現在のマレーシア国には経済力があるようだ。成田ークアラルンプール（日本との時差は 1 時間）のマレーシア航空の機種は Air Bus A333 で、中古機ではなかった。ビジネスクラスの座席は前後の席とは完全に独立しており、寝るときに座席は完全フラットになった。老人でもクアラルンプールまでの 7 時間の飛行が苦にならなかった。これからの私の海外旅行は、東西移動は避けて、時差の少ない南北移動に限ると思った。ただし、空港の冷房は効きすぎである。帰路ホテルを 12 時にチェックアウトして、東京便のペナン出発時刻は 20 時 25 分だった。途中クアラルンプールで乗り継ぎがあり、機中泊。空港までは車で約 1 時間。長時間小さな空港にいることになってしまい、熱帯にいるのに寒くて困った。ペナンへはぜひまた行きたいと思うので、次回はホテルで時間調整をする。

結論として、とてもすばらしい旅だった。疲労の回復に帰国してから 1 週間かかったが、また寿命が少し延びたような気がする。遊学期に入ってから死期が遅くなったなんて、変だ。

6. 越中八尾・小布施・諏訪大社一人旅（2017 年 9 月 1～3 日）

筑波大学の定年が近づいた頃に、庄川扇状地の地下水調査に 3 年間かかわったことがある。国交省の仕事を請け負ったコンサルが私を委員長にする調査委員会を組織した。主目的は河川水と地下水の交流である。調査結果は、庄川からの不飽和浸透など博士論文に値するほどのすばらしい内容だったが、その成果が、学術論文として公表されたかどうかは知らない。地元出身の国交省現地事務所の副所長と親しくなり、その人の親切な勧めもあって、万事手筈を整えてもらい、日出と一緒におわら風の盆を見物することになった。し

かし運悪く当日は天候不良で ANA の富山行きが飛ばず、その計画は実現しなかった。当時はまだ富山は僻地で、交通の便が悪かった。日出の一周忌が間近になってようやく八尾旅が実現することになって感無量だ。旅行の手配はまた JTB に頼んだ。

今回は「JTB 東日本夏まつり おわら風の盆」という個人旅行で、オプションとして事後に小布施と諏訪大社を組み込んでもらった。一泊目の宿は富山エクセルホテル東急で、チェックインして荷物を預け、八尾までの片道タクシー券を渡された。同じ名前のホテルには 5 月に松江でも泊まった。このホテルは駅前にあって便利だし、最小限必要なものは揃っているが、味はない。日出なら「面白くないからこんなホテルはもういや」と言うだろう。でも、現代のサラリーマンが必要とする条件は満たしている。老人が文句をいう筋合いはない。

つくばの大穂支所前を 6 時 55 分のバスで出て、上野発 9 時 26 分のかがやき 507 号、車中で上野駅の駅弁常陸牛めしで朝食、富山着 11 時 34 分。八尾へは満員の高山線の各駅停車で行った。井田川の鉄橋をわたる。民家の屋根は黒瓦。稲刈り前の田んぼのあちこちに枝豆畑があった。越後平野では枝豆は畦を有効利用して植えていたが、この扇状地では枝豆好きが多いので畦だけでは間に合わないのか、それとも大豆収穫が目的なのか。八尾駅へ着いたのは 14 時頃で、街まで 30 分ほどブラブラ歩いた。少し風はあるが快晴。天気予報はあてにしていらないが、傘は持参した。しかし今回はいいほうに外れた。今日の主な目的は町流しを観ることで、17 時開演の曳山展示館と、19 時開演のおわら演舞場へはできたら行きたいと思う。

まず八尾おわら資料館へ行って、基礎的な知識を仕入れた。係りの人が観光客を相手に次のような説明をしていた。「八尾の踊りは見世物ではなく、町内の人が勝手に出てきて、勝手な場所で、勝手に踊ります。運よく町流しを見つめることが出来たら、そこまで行って観てください。踊りは一回限りで、とても不親切な踊りです。すみません」。町流しは 15 時頃から始まる。何ヵ所かで町流しの後を追っているうちに、彼らは勝手に踊っているのではなく、旧家や料亭などご祝儀をはずむ家の前で踊っているのに気づいた。私が発見したこのフィールドワークの知で、町流しを捕まえることが容易になった。深編笠を被った女の子の手さばきがきれい。男衆が力強く両腕を突き出す。十分に楽しむことができて満足した。

大学のクラス担任の一人だった歴史地理学の浅香幸雄先生は富山県のご出身で、宴席ではよく「越中おわら節」を唄われた。でも当時その唄が八尾の唄だとは、私は知らなかった。このたび町流しで唄われた本場の高音で力強い正調おわら節をきいて、地元の人風の盆にこめる愛を感じた。合いの手の女の子の声、哀愁を帯びた胡弓のひびき、やはり情報はフィールド場フィールドの中にあるときに情報量が最大になる。だから人は旅に出るのだ。八尾曳山展示館ホールへ 17 時の入場券を買って入ると、広い館内は満席である。1 時間で全席入れ替えになる。各町内のグループが交代で踊っているらしい。踊りを観ているうちに不覚にも眠ってしまった。

家族とバリ島へ初めて行ったのは、シンガポールでの1975年のイースターの休暇中だった。まだ観光客の少なかった時代で、バリ島では踊りを暗闇に近い野外で観た。その踊りはバリの人の生活の一部で、見世物として踊っているのではなかった。その後、日出と一緒に2度バリ島で遊んだが、その時はもう踊りは観光客相手の舞台興行になっていた。日出は「バリの踊りはお線香の香りと土のにおいがしなければ本物ではない」と不満気だった。彼女もフィールド派なのだ。八尾の踊りも同じである。観光客にかまわない勝手な踊りだからこそ味があって、面白い。曳山展示館で眠ってしまったこともあり、19時からの演舞場の2時間の舞台は観ないことにして、タクシー券で早めに八尾を去った。

タクシーの中で、もう暗くなったのに昼食がまだだったことに気づき、「富山のどこかおいしい寿司屋さんの前に着けてください」と運転手に頼む。「私は入ったことはありませんが、ここが美味しいと評判の店です」と着けてくれた寿司屋へ入った。店の名前は忘れたが、店に入ると既視感があった。富山へは調査で度々来ているので、誰かが連れてきてくれた店だ。この店なら何回か来ている。だが店の主人に、予約で満席だと断られた。風の盆だから仕方がないかと、ホテルまでの電車3停留所区間を歩くことにして、途中で手頃の店を探した。名古屋で10年以上もホテル住まいをしたので、店探しは得意だ。ここだと決めて入った地魚料理柳橋は当たりだった。先客の男二人が煮魚で酒を飲んでいて、中年の夫婦が経営する小さな店で、おつくり定食と枝豆にノンアルコールを頼み3100円。枝豆は注文してから茹でたが、味は普通だった。大きな漆塗りのお椀にたっぷりのみそ汁と甘塩のなす漬がご飯によく合う。板棒状に切った甘い生ニンジンと大根に味噌を付けてかじる。不漁だったというおつくりの味はまあまあだったが、ご飯がおいしくて腹一杯になり、満ち足りてホテルへ戻った。

二日目は新幹線で長野まで行き、長野電鉄に乗り替えて小布施で降りた。駅構内の案内所でボランティアの松沢さんから小布施の説明を受ける。私が、昨年89歳で亡くなった小布施出身の市川健夫さんの話をすると、彼は「高校で市川先生から歴史を教わりました」という。「あの先生を悪く言う人は一人もいません。ただ研究のことしか頭にない人でした」には、さもありませんと納得。市川さんは人文と自然を両方カバーできる古いタイプの地理学者で、高校教師から東京学芸大学教授になった異色の人である。NHKブックスを何冊か出しており、私は同ブックスの『地下水の世界』を市川さんの勧めで書いた。発行部数2万部弱で絶版になった20年前のこの本を、講談社の編集者が見出して、訂正・加筆後『地下水と地形の科学 水文学入門』と改題して2013年に学術文庫版として出してくれた。2017年7月現在4刷6600部と売れ行きは悪くない。そんな縁もあって私は小布施を訪ねる気になったのである。

地元の豪農商高井鴻山の招きで、葛飾北斎は83歳のとき初めて小布施へ来た。以来4回も訪れて、岩松院本堂の22畳もある大間天井絵「八方睨み鳳凰図」や北斎館に展示してある多くの肉筆画を残した。岩松院の入り口には、幹の直径が20cm以上もある白と桃色のムクゲの大木が2本、大きな花を咲かせていた。また、おぶせミュージアム・中島千波館に

は、地元出身の日本画家千波の花の絵がたくさん展示してある。小布施は絵好きにはたまらないまちである。私が千波館を訪れたとき、千波自身が出演する NHK の「旅のチカラまぼろしの牡丹の山」を放映していた。これは 65 歳の千波一行が牡丹の原種を探しに、ナシ族にとっては主神である聖山、玉龍雪山を登る記録番組である。最後に一行が高山の斜面の牡丹の原種のある場所にたどりつき、千波がそこでスケッチをするまでを映像化している。地下水に依存するナシ族は日本人にとってもよく似た文化をもっている。私は、今は亡き愛知大の宮沢哲男さんと同大学の COE で私の助手だった朱安新君（現南京大学准教授）と三人で 4 回麗江古城の調査を行い、「麗江古城の水と社会」という長い論文を書いた。そんな因縁もあり、私は 1 時間近いこの番組の映像をただ一人でじっくりと観た。旅ではこのように思いがけないことが起こる。

岩松院の近くにある、600 年前の重要文化財・雁田薬師堂も一見の価値がある。そこからフローラルガーデンを見て北斎館へと歩いている途中にブドウを売る店があった。皮ごと食べられますという売り声だったので、二粒試食してみると、これがうまい。初めての名前のブドウで、瑞々しく甘さも上品。まだ収穫量が少なく、大都会への流通経路には乗っていない、地元の人しか食べられない品種とみた。歩きながら食べるために一房を 900 円で求めた。小布施ではお茶の代わりにこのブドウを食べながら街歩きをした。それでも食べきれず、残りは松本のホテルの冷蔵庫に収まった。

昼食は朝日屋でざるそばを食べた。そばは三段盛りで量はつくばの 2 倍はある。枝豆も頼んだら、これがまたとてもうまい。もちろん注文を受けてから茹でる。新潟で子供の頃に食べた茶豆には及ばないが、それに次ぐうまさである。北斎が好んだ土地だけのことはある。道路沿いの栗林には、収穫前の青々としたとても大きな栗のエガがたわわに実っていた。リンゴも色づき始めた。腹一杯で栗は食べそこねたが、まさしく小布施は「栗と北斎と花のまち」である。このうたい文句に「、そして果物のまち」を加えれば、小布施はこれから観光地としてさらに名を上げるだろう。歩き疲れたので、松本のホテルでは 1 時間マッサージをしてもらった。

三日目。二泊目は諏訪で泊まりたかったのだが、諏訪湖畔の大きな花火大会で宿がとれず、JTB は松本のブエナビスタを選んだ。出来たばかりのホテルで、小澤征爾のグループもここに泊まるらしい。このホテルでくれた国宝松本城の入場券に惹かれて、お城を観る気になり、天守閣へ登って、とても得をした気分になった。今まで観たお城の中では最高である。世界文化遺産への登録を目指しているらしいが、成功を祈る。お城の近くにある市立博物館のアルプスの水彩山岳絵画の展示もすばらしかった。館員に「松本には流しのタクシーはありませんよ」と言われたが、運よくお城の近くでタクシーがつかまり、ホテルへ寄ってもらってリュックを受け取ってから、松本駅へ行った。

中央線の松本発 10 時 40 分の高尾行きに乗り、トンネルを抜けると岡谷、その次の下諏訪で降りて、諏訪大社下社を春宮、秋宮の順に歩いて参拝した。いずれも山を後ろに控えており御神体は神木である。駅へ戻ったのが 13 時 25 分ころで、(14 時) 31 分発の普通列

車の表示、それをシメタ 13 時 31 分発だと勘違いし、ホームで待つが列車はこない。すると 8 分発の特急がくるとのアナウンスがあり、駅員に 31 分はどうしたのかと尋ねると「予定通りで、遅れてはいない」との返事。このとき 1 時間勘違いしていたことに気付く。時間が惜しいので特急に乗ると下諏訪→茅野の二駅で特急券 750 円を請求される。長野→松本の特急券は 590 円だったのに高い。茅野駅から上社までは遠いのでタクシーで回ることにする。

諏訪大社上社の背後も山で、山が御神体である。「御祭神の健御名方神は大国主神（大黒さま）の御子神で、妃神が八坂刀売神、八重事代主（えびすさま）は御兄神にあたります」と、100 円で求めた神社の由緒書きにある。出雲大社との縁は深いのだ。まずタクシーで前宮まで行ってお参りし、次に待たせておいたタクシーで本宮へ行って参拝した。さすがに二千年近い歴史があるというお諏訪さまである。御祭神は大国主神の二男と書いた本もある。5 月に行った出雲で、大国主命が実在した人物であることを確認した。そのことを考えると、二男説も史実である可能性が高い。各社に立つ四本の御神木を拝んで、神道の源が自然崇拝であることを改めて感じた。四社をすべて参拝したので、さぞかし大きなご利益があるだろうと思ったが、疲れも重なってか、次に書くような大失敗をやってしまった。

本宮の鳥居前でタクシーを降り、運転手に「ここで待っていますよ」と送られてから、手を清め、長い廊下のようなものの中を歩いてから、本殿に行った。さすがに本宮だな、史君はここで合格祈願をしてもらったのか、それなら合格間違いなしだ、などと考えながらお参りをしてから、山の中腹に見える御神木を拝み、みんなが歩く方向へついていった。鳥居の手前には手を清めるところがある。もうこの時点で四社の記憶がゴチャゴチャになっていた。鳥居を出たが、そこで待っているはずのタクシーがない。それでパニック状態になってしまった。あちこちと 1 時間近くも探したが、タクシーは見当たらない。困り果てて社務所へ相談に行ったら、「どこのタクシー会社ですか」と聞かれた。でも私にはわからない。これまでは志野か麻里がそばにいてくれたので、私には万一の時に備えてという気持ちがない。日出は万事に慎重派で、無防備の私のことを全く信用していなかった。彼女だったらタクシー会社の名前も運転手のケイタイ番号も聞いていただろうに……。彼女がお金についてしまり屋さんだったのは私のせいでもある。結婚して間もなく、私がいかに世間のことに無知であることを知って、彼女は私に相談することなく、なんでも自分で決めるようになった。給料は全額渡したが、お金はすべて彼女が完璧に管理した（お陰で今になって助かっている、感謝）。幸い私には副収入が沢山あったので少しも困りはしなかったが……。

社務所の若い人は「たぶんこのタクシー会社でしょう」と、電話番号を書いたメモを私にくれた。でも、遊行期に入った私はケイタイもデジカメも持ち歩かない。PC でメールは使っているが、スマホは使ったことがない。「公衆電話はどこにありますか」と聞いて、その若い人にあきれられた。日出の気持ちがよくわかった。これを見かねたのか、社務所

で一番年配の男性と、歳をとった女の人が出てきて、「鳥居は2か所あります。もう一つの鳥居のところでタクシーが待っているのではないですか」と、二人で私をそこまで案内してくださった。確かにタクシーはそこで待っていた。二つの鳥居はだいぶ離れていた。運転手は「あまり遅いので、探しに行こうかと思ったのですが、動くとは行き違いになると困るのでここで待っていました」という。お二人に丁重にお礼をいってから茅野駅へ向かった。待ち時間を含めてタクシー料金は6900円だった。領収書を見てアルピコタクシーだと分かったが、後の祭り。

茅野駅で（グリーン車は満席だったが）運よく16時20分発のあずさ26号の指定席特急券が取れた。日出の祥月命日が9月26日で、取れた指定券があずさ26号である。偶然の一致か、日出からのサインか、それとも諏訪大社のご利益か。小布施へ行くときも長野電鉄でも小さなミスをした。3度も勘違いのミスをして自分の判断力の衰えを痛感させられた旅だったが、間もなく85歳になる老人の一人旅としてははずまずはずの出来だったのではないかと、自らを慰めた。最後の26という数字で、かろうじて合格点がもらえたのかもしれない。メディケアに着いたのは21時ころだった。とても疲れた。

この旅の締めくくりに、哲学書としては珍しくベストセラーになったという^{あずまひろき}東浩紀の『観光客の哲学』について考えてみたい。私は、世の中の大きな流れの基本を決めているのは物理学だと思っている。近代という植民地主義の時代は、先進国が物理学を基礎にする近代科学（ニュートン力学を基礎にする科学）の知識を応用して、近代産業を発展させ、その近代科学の魅力と武力で、まだ近代化していない国々を植民地化し、そこからの富を独占して、彼らだけが物質的な繁栄を謳歌した、モノが中心の時代だった、と私は考えている。その近代という時代は20世紀で終わった。

近代科学に基礎をおく近代という時代の世界観は「還元主義・機械論・決定論」である。経済学も、歴史学も、すべての学問が物理学をお手本にして、それぞれの分野で合理性と客観性を追求した。その結果生まれたのが歴史を物理学のように法則性で読み解こうとした「マルクス主義」である。経済学は経済活動を物理学のように数学を使って読み解こうとした。しかし近代科学は、マクロな世界を近似的に法則化することに成功しただけで、ミクロな世界には通用しなかった。

ミクロな世界を対象にする量子力学の基礎は1920年代に完成し、ポスト近代への模索が始まった。ポスト近代の世界観は「絶対的偶然・確率的法則・非決定論」である。1932年生まれの私は、量子力学を死ぬまで認めなかったアインシュタインと量子論の巨匠ニールス・ボアの論争が行われていた最中に大学生活・研究生活を送った世代の科学者の一人である。私は水文学者として（量子力学について語る能力は持たないが）「万物の源は情報であり、その情報を持続的に供給するシステムが水循環である」と信じている。私と同様に「万物は情報である」と考える物理学者があることは、「4. ペナン旅の前日に考えたこと」で述べた通りである。

マイクロな世界が「情報」すなわち「ビット」からなることを見抜き、今日のような情報化社会を実現させたのは、情報にかかわってきた数知れない技術者たちであった。「万物が情報である」ことを結果として証明したのは、これらの技術者たちだったと言ってもいいのかもしれない。「情報」（つまりコト）が中心になるポスト近代は情報化社会である。20世紀は近代社会からポスト近代社会への移行期だった、と私は考える。

東浩紀の問題意識は、現代社会がナショナリズムとグローバリズムに引き裂かれているという認識に始まる。そして次のように書く。

かつて共産主義は、個人でも国家でもない第三のアイデンティティとして、「階級」なる概念を提示したことがある。共産主義の革命性は、じつはこのアイデンティティの発明にこそあったと言える。共産主義はその第三のアイデンティティに依拠していたからこそ、ブルジョワ国民国家を否定しつつ、同時に個人の自由（資本主義）をも批判することができたのである。けれども、その共産主義は冷戦構造の崩壊とともに影響力を失った。したがって、いま個人と国家を同時に批判するための足場がない。

彼はこの状況を脱するためには、個人でも国家でも階級でもない、第四のアイデンティティの発明が必要であると考え、『ゲンロン0 観光客の哲学』（ゲンロン、2017）の構想にたどりついた。その詳細については原著にゆずるが、私がここで彼の著書を引用した理由は、彼の主張にポスト近代の哲学への萌芽を感じ、それを「情報」という視点から私なりに考えてみたかったからである。

彼はさらに書く。「観光の本質が情報の誤配にあること、そしてその誤配がある種の啓蒙に通じていること」「その『誤配』こそがまた新たな理解やコミュニケーションにつながったりする。それが観光の魅力なのである」。彼は、物見遊山に出かける観光客は「帝国と国民国家の隙間から生まれたノイズであり、私的な欲望で公的な空間を変容させるだろう」と期待する。「観光客の哲学」が政治を動かす力にまで成長することができるかどうかは、私にはわからないが、旅をネグントロピー源だと考える私には、観光と旅は同じものに思える。すでに述べたように、私は今回の旅で多くの失敗をした。しかしそれらの失敗は、「誤配」と同様に、新たな理解やコミュニケーションにつながり、旅を豊かなものにしてくれた。失敗もネグントロピー源になったと言ってもいい。

最後に一言だけ付け加えておきたい。旅や観光で取得する情報は、^{フィールド}「場」にあるナマ情報である。もぎたての枝豆やドリアンがおいしいように、情報も、加工されてないナマ情報が情報量は最大である。フィールドワークとは、その豊かなナマ情報を自分で取得して、自分独自の考えを育てる作業だと、私は思っている。東浩紀が、「誤配」される情報をふくめて観光による情報の取得をすすめるのは、私には、「フィールドワークのすすめ」と同じだとうつつ。「観光客の哲学」が社会を動かす時代のくることを期待している。現在の情報化社会では、すべての情報が加工されて、情報は痩せている。痩せた情報にたよってスマホから手が離せない若者の姿を見ると、情報化社会の未来が明るいものとは思え

ない。社会の仕組みを変えるには「観光客の哲学」やフィールドワークによる「臨床の知」（つい最近亡くなった中村雄二郎が提唱）が不可欠である。

《ここで遊行記を半年ほど中断します。今回の旅から帰って一日休んだ翌日、古い友人が JICA 関係のコンサルの人と筑波大学の教授をつれて三人で訪ねてきて、今年の 12 月と来年の 2 月に、JICA の研修で、各一日 5 時間ほど、英語で 2 回、地下水の話をしてくれと頼まれました。「昨夏、安倍晋三首相がインドへ行かれた時に、インド政府部長クラスの水文関係技術者の日本での研修を約束され、その研修を JICA がやることになった」のだそうです。先方からの要望があつて地下水研修に 1 日をあてたので、「好きなように話してくれればいい、条件はつけない」ということで、引き受けてしまいました。私は若い人を紹介すると言ったのですが、どうしても私でなければ駄目だと押しきられました。英語での講演は、愛知大学の COE の最後に南京大学で実施した「麗江国際シンポジウム」のとき以来です。家内が居なくなつて一年たち、身体はほぼ元にもどりました。これを好機に心を整えることにします。頭にインプットした英語情報は消えていないはずですが、脳内の英語情報ネットワークを再起動させることが出来るかどうか、試してみます。

遊行期の旅で秋に娘たちとダーズリンへ行く予定でしたが、現地の茶摘み労働者がさわざだし、インドは情勢不安との情報が入りましたので、中止することにしました。代わりに来秋バリ島へ行こうかと考えています。》

遊行記のための外泊旅行はしばらくお休みにしたが、泊まりなしの近回りへは出かけている。9月16日と18日に、川越祭り・佐原の大祭とともに関東三大祭りといわれる「石岡のおまつり」に初めて二日も行った。石岡は常陸国国府のあったところで、伝統のある常陸国総社の祭りが三日間つづく。故郷を離れた人が正月には帰らなくても「おまつり」には帰るといわれるほど重要な祭りだそう。町内ごとに木製の立派な山車と御神楽の大きな頭を持っていて、大太鼓をたたきながら町中を引いて回る。娘たちが並んで団扇をくるくる回しながら軽快なリズムでお囃子をうたう。山車の上ではお狐様、ひょっとこ、おかめなどの面をかぶった男がひょうきんに腰を振る。おまつりの当番は町内の順番制であり、古い地域社会のしきたりがいろいろと残っているのがわかって、とても面白かった。また来年も行きたい。

9月28日には、日本橋高島屋8階ホールの池田学展と国立新美術館のサンシャワー・東南アジアの現代美術展をダブルヘッダーした。また昼夜兼用の食事をミッドタウンの鈴波でとった。おいしいケーキのあるコーヒー店も新たに見つけた。夜はコンビニのおにぎり一個。

池田学の世界は量子論の世界でもある。3m×4m の大作《誕生》では、極細のペンで細部をミクロに描きつけ、制作に3年もかけて、3.11の東北大地震の災害からの「誕生」というマクロな世界を、希望をこめて見事に描き出している。私はこの絵を観て、（描かれ

ている)情報は何でもありで(村上春樹の『騎士団長殺し』と同じ)、時空もディメンションも無視し(安野光雅の「情報絵画」に似ている)、大まかな構想だけを決めて描きながら考え考えながら描き(ベルクソンのいう生命の流れや草間彌生と同じ)、思い付きをその場で画像化する(過去の記憶の可視化)など、これこそポストモダンの絵画の典型だと思った。これはあくまでも私の解釈だが……。それでまた重い画集を買ってしまった、3700円もだして。

メディケアへ帰ってから見たら、画集の腰巻に、福岡伸一の「微小の中にある世界が、極大の空間に広がる宇宙と、瞬時に重ね合わさってしまうような、言うなれば量子論的な同時性。この同時性をいずれも全く破綻なく共存させうることが、池田学の天才性の新骨頂だと思う」という文章が引用してあった。この絵を観て私と全く同じことを考えた科学者がいたので嬉しくなった。

日出の祥月命日である9月26日には、私がJICAの件でぜひ会いたいと思っていた筑波大の辻村君が、宋夫妻をつれてメディケアへ突然来た。宋君は私が筑波大最後の年に博士の学位を出した3人のうちの一人で(ほかの二人は韓国人と私大出身の日本人)、五十何歳かになった今は中国科学院で水文分野の指導的教授のポストに着いている。偶然にも筑波大学で会合があり訪日中だった。日出の祥月命日とは知らずに、久しぶりに私に会いに来たのである。辻村君とは10月12日に筑波大図書館へ借りた本を返しに行くのでそのときに相談することにしたが、何故か不思議なことに、数日前から私は敦煌の壁画を観たいという気分になっていた。いい機会だったので、宋さんに敦煌へ連れて行って欲しくないかと頼んでみた。宋さんは喜んで、時期的には9月が一番いいといったのだが、9月にはバリ島へ行くかもしれないので、来夏8月の陽気のいい時期に敦煌へ連れていってもらおうことにした。

近頃の私は、こんな調子で、思ったことが自然に思い通りに実現することが多い。ラズロが直観したように、情報についてのアカシク・フィールド(Aフィールド、私は情報場と呼んでいる)は存在し、宇宙は情報場で「時間的にも空間的にも相互結合している」のかもしれない。ラズロの話は、ノンブル社の『自然といのちの尊さについて考える』で分担執筆させられた「自然と人間のかかわり」の中に書いた。私はその情報場へアクセスできる人が天才ではないかと思っているが、私自身は(努力は惜しまないが)天才ではないから、家内がああ世から(あの世の霊は天才を超えているかもしれないので)私のために情報場にアクセスしてくれているのかもしれない。

私が「万物は情報だ」という話をしたときに、宋さんがこんな話をした。中国で、片腕を切り離れた人が、その状態で、切り離れた自分の腕に気を送りその腕をうごかした、と。以前に「気」について書かれた本を何冊か読んだことがあるが、私には「気」は実在すると思えなかった。同じ量子状態におかれた二つの粒子は時空をへだてても相互作用するというが、それは本当かもしれない。手足の不自由な人が、装着した最新の器具を、思いを伝えるだけで思い通りに手足を動かせるようになったらしい。スピリチュアルな世界

に科学のメスが入るのはこれからである。何が出てくるか楽しみだ。なお私たちが泊まったペナンのホテルのスパの名前は「気」を意味する中国語「Chi」であった。

今春奈良へ行く前に、改装なった熱海の MOA 美術館へ行った。そこで、この美術館の創設者岡田茂吉の哲学が「優れた美術品は荒廃した社会人心を陶冶する」であることを知った。ピカソの「芸術は、日々の暮らしで心につもった埃を洗い落としてくれる」も、私の「アートはネグトロピー源なり」も、みな同じことを言っているのだ。アートの力とは、それを制作した人の魂が生み出す情報の力だと思う。ただし、人の心をうつ絵とそうでない絵がある。作者が魂を込めた絵が人の心をうつのだとすると、その魂は情報としてどんな風に絵の中に込められているのか、そこが私にはまだわからない。

サンシャワーは、アート展としては期待外れだったが、出展者のほとんどすべてが、自己のアイデンティティの喪失に苦しんでいることがわかったのは収穫だった。アセアン地域の人々は、欧米による植民地支配と戦後の共産主義化の嵐の後遺症からまだ精神的に立ち直っていない（日本人はようやく立ち直ったようだが）。展示してある彼らの現代美術から、アイデンティティの確立に苦しんでいる彼らの心がよく読み取れた。アートが心や魂の具象化であるからだろう。

シンガポールの南洋大学の同僚に Tan という姓の若い教員がいた。彼の兄も同僚の教員だが、その姓は Chang である。なぜ？と問うと、「いずれも漢字は陳だが、役所で姓をローマ字登録するときに役人がそのように読んで書いてしまったから」という答えだった。漢字は、多数の方言をもつ中国では、意思伝達のための便利な手段である。しかし同じ漢字でも方言によって読み方（したがってローマ字表記）が違うから、このような問題が起こる。韓国でも、李さんが Lee さんだったり、I（イー）さんだったりする。東南アジアには中国系のほかに、インド系、アラブ系、姓をもっていなかった原住民などが入り混じっているから、第二次大戦後に人名を登録するときに Tan さんと同じような経験をした人が多いようだ。そのことを口頭で延々と訴える映像が「サンシャワー」のビデオ展示にあった。個人のアイデンティティは、その人の属する社会の文化を基礎にしてしか成立しないが、混合民族社会のアセアンでは、まだ固有の文化というものが確立していないのである。日本という国に生まれて本当によかったと思う。

10月26日には国立博物館の運慶展（30分まち）と新国立美術館の独立展を観た。2メートル近い大きな像が多く、いずれも素晴らしかったが、私は小像の大日如来像に魅せられた。梓澤要の『荒仏師 運慶』（新潮社、2016）の書き出しは「わたしは美しいものが好きだ」である。たしかに「日本のミケランジェロ」の名がふさわしい。国立西洋美術館の北斎とジャポニスム展へも行きたくなった。

独立展を主催する独立会は、私が入居している施設の絵画教室の先生が関係しているグループで、毎年案内状をいただく。1000点近い作品の展示があるので楽しみにしており、私が観るのは今年で三回目である。先生の200号の絵は今年も若い女性のヌードで、ポーズもほとんど同じ。しかし、今年は「Nuclear/Woman」という題がついていた。基調色は

黄と黒と赤。女性の体から発するような赤で縁取った白い直線が左に4本、右に3本に斜め上に向かって伸びている。3年目にしてようやく、先生の意図がわかった。「日ごろおとなしい女性も、原子炉も、時には爆発するぞ!」。私は先生に、「ボクが総理大臣だったら先生の絵を買い上げて、原子力安全委員会の委員長室に飾ります」と言った。先生は照れていた。

11月7日の産経新聞の正論欄で、筑波大学の古田博司教授がこんなことを書いていた。「韓国人の『文化』、文化はシナ文化しかなく、自分の文化には関心がなかった。だから彼らは『入って来たら内の物』だと思う。剣道も華道も韓国起源、孔子は韓国人だったという。外国人はこうのたまう彼らの文化(?)を俗にオリジナルといっている。……『コリアンはシナ文化しかなかったので、文化に関心をもたなかった』……大阪市大の野崎充彦さん(朝鮮古典文学の専門家)は、長い研究の末、『朝鮮古典文学の特徴は朝鮮の不在である』という結論に達してしまった」と。

これは北朝鮮でも同じではないか。真偽は不明だが、現在の金王朝の元祖である「金日成」という名前がそもそもパクリだったという本を読んだことがある。アセアン諸国と同様に、国家という制度がこの世にある限り、国家のアイデンティティ(あるいは正統性)の不在は深刻である。